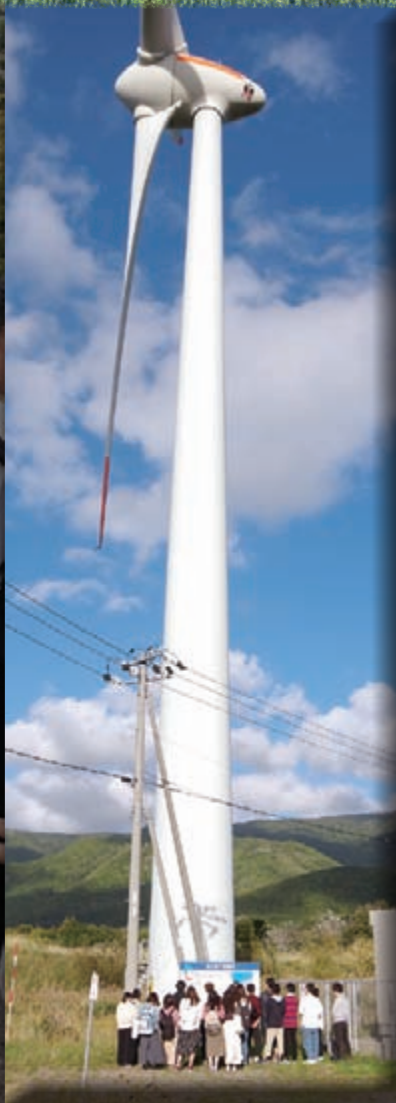


地域研修報告書

2019



1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

1 ……地域研修ガイダンス

2 ……地域研修1年間の流れ・研修地一覧

4～29 ……地域研修ゼミ報告（2019年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加25ゼミ 計384名）

4 1部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ

資源・エネルギー生産の歴史的展開過程と現状を学ぶ
研修地／芦別市



5 2部浅妻ゼミⅠ

資源・エネルギー賦存と登別市域の地域的特徴
研修地／安平町・登別市



6 1部内田ゼミⅠ・Ⅱ

平取町のまちづくりに対する地域住民の意識
研修地／平取町



7 2部内田ゼミⅠ・Ⅱ

京都を訪ねる観光客のアイヌ文化に関する認知度
研修地／京都市



8 1部佐藤(信)ゼミⅠ・Ⅱ

南空知地域の地域資源と先進農協の歴史・現在
研修地／美瑛市・三笠市



9 2部佐藤(信)ゼミⅠ・Ⅱ

大きな協同、小さな協同の取り組み事例を探る
研修地／北広島市・恵庭市



10 1部・2部川村ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ

学生アルバイトをめぐる問題 労働組合、労使関係
研修地／札幌市



12 1部徐ゼミⅠ・Ⅱ

日中間の印象調査
研修地／千歳市・札幌市



14 1部中園ゼミⅠ

母子世帯の現状と奨学金問題
研修地／札幌市



15 1部西村ゼミⅠ・Ⅱ

学生との協働によるトヨコロ創生プロジェクト(後編)
研修地／豊頃町



16 2部西村ゼミⅠ・Ⅱ

ローカル・ベンチャーと地方創生
研修地／厚真町



17 1部濱田ゼミⅠ・Ⅱ

人を惹きつける東川町の魅力
研修地／東川町



18 2部濱田ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ

人口減少下で歌志内市は地域をどう支えているのか？
研修地／歌志内市



19 1部早尻ゼミⅠ・Ⅱ

海と山と風の恵みを受ける寿都町の地域づくり
研修地／寿都町



20 1部平野ゼミⅠ・Ⅱ

札幌市のフェアトレードタウン認定についての調査
研修地／札幌市



21 1部古林ゼミⅠ

釧路湿原の保全事業と観光資源としての利用
研修地／釧路市・釧路町・標茶町・鶴居村



22 1部古林ゼミⅡ

本州における野生鳥獣害対策の現状を知る
研修地／福井県鯖江市



23 1部水野ゼミⅠ・Ⅱ

朝鮮人労働の現場を見学し、実態を学ぶ
研修地／幌加内町朱鞠内



24 1部水野谷ゼミⅠ・Ⅱ

離島における観光と地域活性化—奥尻島を事例に
研修地／奥尻町



25 1部宮入ゼミⅠ・Ⅱ

複合農業地域からみた北海道農業の将来像
研修地／富良野市



26 2部宮入ゼミⅠ・Ⅱ

大規模畑作経営の現状と今後の課題
研修地／豊頃町



27 1部山田ゼミⅠ

ITを活用した地域活性化
研修地／札幌市



28 1部山田ゼミⅡ

南城市・北谷町の観光政策の課題と対策について
研修地／沖縄県南城市・北谷町



29 2部山田ゼミⅡ

酒蔵とその観光による地域活性化
研修地／増毛町・旭川市・上川町



30 ……現地研修フォトギャラリー

31 ……地域研修報告会（準備と当日）

2019年度 『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部 古林 英一



百聞不如一見

2019年度地域研修報告書を発刊できることを喜ばしく思います。まず最初に、地域研修の実施にあたり、ご協力をいただいた道内・道外の皆さまに深くお礼申し上げます。

本学発足以来半世紀以上を経た2003年、経済学部は経済学科と地域経済学科の2学科体制となりました。地域研修は地域経済学科発足と同時に開設された科目です。「学びの場はキャンパスだけではない」を基本コンセプトとし、自治体、企業、地域住民など、地域社会を構成する様々な主体に直接アプローチし、そこから学ぶのがこの地域研修です。

地域研修は「百聞不如一見（百聞は一見に如かず）」を実践する科目です。よく知られているこの成語の元々の出典は、中国の史書「漢書・趙充国伝」にある「充国曰、百聞不如一見、兵難踰度、臣願馳至金城、図上方略」だそうです。趙充国は前漢の將軍で、ざっといえば、「一回見ることは百回聞くことにまさる。前線は遠くて作戦を立てにくいので、前線である金城に自分を行かせてくれ。その上で作戦を立てると充国が言った」ということだろうと思います。

趙充国は今から二千年以上昔の人ですが、充国の言葉は情報化社会である今日こそ改めて噛みしめるべき言葉だと私は思います。インターネットを通じて氾濫する玉石混淆の情報のなかで、何を信じどう行動するか判断は、かつてとは比べようもないくらい難しいことになっています。

情報で飯を食うことは可能ですが、情報を飯として食うことは、人間が生物である限り不可能です。情報の背後にはリアルな人間の営みがあることを、身を以て体験し、感性を磨くことがこの地域研修の究極の目的です。

本報告書は学生諸君が情報を血肉化した過程を表現したものといっているでしょう。何かの機会にこの冊子を読まれた高校生のみなさんが、進路決定にあたり、この冊子を契機として、私たち北海学園大学経済学部を志望してくれるなら、これにまさる喜びはありません。私たちは地域を担う意欲を持つ若者を待っています。

地域研修ガイドンス | 2019年4月20日 50番教室



地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修と、事前学習・事後学習・報告会でのプレゼンテーションから構成されます。教室での経済学・地域経済学関連の講義から学んだことと、地域のリアルな実態を結びつけて理解するために、複合的な要素から構成した実践的な科目です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、自ら収集した資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では自治体・関連団体・企業などからのヒアリング、施設見学、アンケート等の実態調査、フィールドワーク、などを行います。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

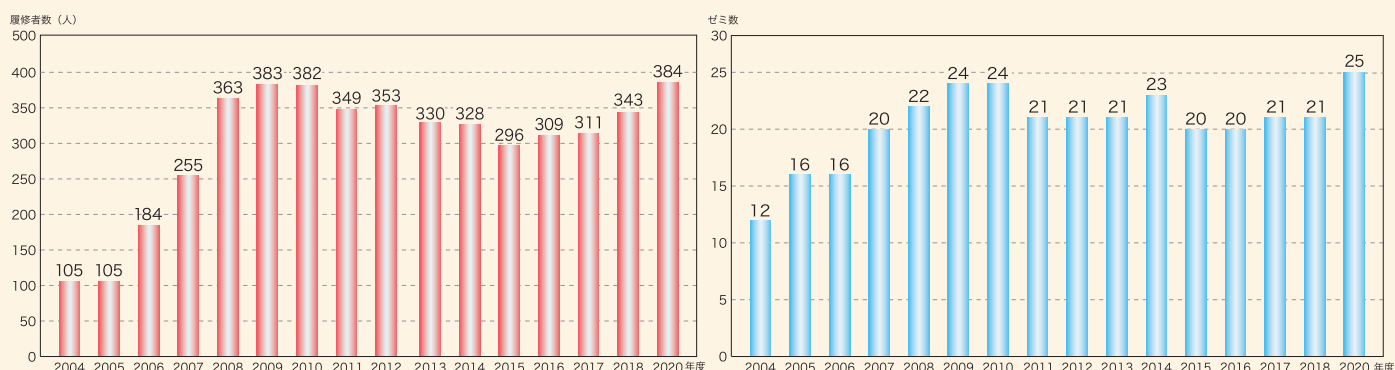
3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



①② 地域研修ガイダンス。③④ 各ゼミによる現地研修。⑤ 現地での報告会の準備。⑥ 事後学習と報告会へ向けての準備。⑦⑧ 地域研修報告会

地域研修履修者数と実施ゼミ数



研修地一覧



留萌総合振興局管内

K 増毛町 2部山田ゼミ

空知振興局管内

L 芦別市 浅妻ゼミⅠⅡ

B 歌志内市 2部濱田ゼミⅠⅡⅢ

N 美唄市 佐藤ゼミⅠⅡ

O 三笠市 佐藤ゼミⅠⅡ

上川総合振興局管内

A 幌加内町 水野ゼミⅠⅡ

B 旭川市 2部山田ゼミⅠ

C 東川町 濱田ゼミⅠⅡ

D 上川町 2部山田ゼミⅠ

E 富良野市 宮入ゼミⅠⅡ

十勝総合振興局管内

F 豊頃町 西村ゼミⅠⅡ

宮入ゼミⅠⅡ

釧路総合振興局管内

G 鶴居村 古林ゼミⅠ

H 標茶町 古林ゼミⅠ

I 釧路市 古林ゼミⅠ

J 釧路町 古林ゼミⅠ

P 札幌市

川村ゼミⅠⅡⅢ、2部川村ゼミⅠⅡ、

中園ゼミⅠ、山田ゼミⅠ

石狩振興局管内

Q 北広島市 2部佐藤ゼミⅠⅡ

R 恵庭市 2部佐藤ゼミⅠⅡ

S 千歳市 徐ゼミⅠⅡ

後志総合振興局管内

X 寿都町 早尻ゼミⅠⅡ

檜山振興局管内

Y 奥尻町 水野谷ゼミⅠⅡ

胆振総合振興局管内

T 安平町 2部浅妻ゼミⅠⅡ

U 厚真町 2部西村ゼミⅠⅡ

T 安平町 2部浅妻ゼミⅠⅡ

V 登別市 2部浅妻ゼミⅠⅡ

日高振興局管内

W 平取町 内田ゼミⅠⅡ

福井県鯖江市 古林ゼミⅡ

京都府京都市 2部内田ゼミⅠⅡ

沖縄県南城市・北谷町 山田ゼミⅡ



1部 浅妻裕ゼミ I・II

参加学生数 26名



浅妻 裕
経済学科
教授



北海道電力旭川支社の皆様と

資源・エネルギー生産の歴史的展開過程と現状を学ぶ

研修地：芦別市

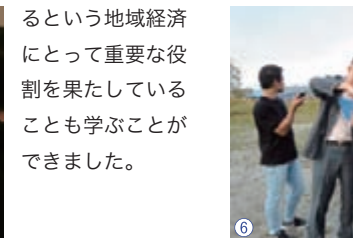
●研修目的

芦別市の石炭産業や関連産業の展開過程を整理し、その背景を国家的な資源・エネルギー政策と、地理的条件の両面から把握する。また、それら産業の現状と地域経済における位置付けにおいても理解を深める。

研修先・日程

- 9月30日 カナディアンワールド公園
芦別市役所総務部企画政策課・経済建設部農林課
- 10月1日 芦別鉱業株式会社新旭炭鉱高根沢露天坑
スターライトホテル木質チップボイラー、
生産プラント(芦別木質バイオマス開発協同組合)
北海道電力野花南ダム・発電所
星の降る里百年記念館
芦別市内フィールドワーク
- 10月2日 帰札

写真①カナディアンワールドにて。②芦別市役所でのヒアリング。③高根沢にて。④木質チップを触る。⑤星の降る里百年記念館で説明をうける。⑥駅舎跡地にて



●総括

今回の研修で学んだことは以下の2点である。

一つは、自然地理的条件を前提に、芦別市の資源・エネルギー産業の展開が国家的な政策や外部資本に左右されてきたことである。明治末期から道央の産業近代化が推進される中で、流量が豊富な空知川水系が着目され、水力発電所の設置が相次いだ。結果として、現在に至るまで道内随一の水力発電所集積地となっている。石炭産業も、豊富な埋蔵量を誇る空知炭田に位置したため、1912年に三菱鉱山が開業し、さらに日中戦争の開戦を契機に出炭量が劇的に増加した。朝鮮人半島出身者や俘虜の過酷な労働によって成立していた事実もある。戦後は、エネルギー革命の中で小規模資本は合理化に対応できず、1960年代以降は閉山が相次いだ。合理化に対応した三井芦別鉱山のみが1982年まで操業を続けたが、その閉山後は人口減少、高齢化の厳しい課題に直面している。

二つ目は、豊富な資源賦存量を背景に、資源生産関連産業は、地域経済において依然として重要な役割を果たしている。石炭産業は大規模な露天掘鉱が市内・周辺に点在する全国唯一の集積地となっている。また、豊富な森林資源を背景として、地産地消でのバイオマスエネルギー利用が推進されている。発電と異なり熱利用中心であるために行政の補助金が必須であるが、域外への所得流出を防いでいる。



野花南ダムの視察

学生研修記

淀川 未来
経済学科2年
千歳高校出身



日當 亮太
経済学科3年
札幌静修高校出身



現地で学習することの重要性を理解

今回の研修を通して、色々な方から直接お話を聞き、実際にその場に行き目で見ることで、ただ自分たちで調べて学習するよりも得られることがとてもありました。芦別の歴史に触れ、まちの変化とその背景、また、木質バイオマスの取り組みや芦別の炭鉱がもたらした影響などです。特に森林資源が豊富な芦別市では、木質チップを活用したボイラーが稼働していますが、価格が比較的高いため、市が補助金を拠出しなければ成立しないという課題を知ることができました。一方で、これにより、燃料購入費の節約になるため、地域所得の域外流出を防いでい

るという地域経済にとって重要な役割を果たしていることも学ぶことができました。

北海道の縮図、芦別で学ぶ

芦別市は過去に炭鉱の街として栄えたが現在はその影も薄く、長閑な田舎町といった印象が強い。芦別はなぜ栄えなぜ衰退したのか、現在芦別市が抱える課題はなにか、過去の資料や現在の状況から考察できる地域研修であった。また、芦別市では小規模化した炭鉱の他に水力発電や木質バイオマスといった地域に根付いたエネルギー生産を行っており、地域経済とエネルギーの持続可能性を考えさせられた。

日本経済の縮図と言われる北海道の更に縮図となった一面を持つ芦別市で学ばされることは多く、ゼミナールでの研究対象としてふさわしく感じた。



2部 浅妻裕ゼミ I・II

参加学生数 10 名



浅妻 裕
経済学科
教授



登別温泉にて

資源・エネルギー賦存と登別市域の地域の特徴

研修地：安平町・登別市

●研修目的

温泉観光地として知られる登別市の歴史と現状を、資源・エネルギー生産・利用の観点から把握する。また上記事項について、市域を構成する3地域の独自性・差異にも着目する。

研修先・日程

- 9月11日 安平町役場、道の駅あびら
登別市総合福祉センター、しんた21（登別市観光経済部商工労政グループ）
アール・アンド・イー融雪システム見学（登別温泉）
登別温泉ふれあいセンターでの研修
- 9月12日 登別郷土資料館
大林グリーンエナジー登別事業所（太陽光発電所）クリンクルセンター
登別温泉エクスカーション

写真①登別温泉にて融雪システムの説明を聞く。②登別郷土資料館で歴史資料の説明を受ける。③クリンクルセンターで説明を受ける。④登別温泉のエクスカーション（太湯沼川足湯にて）



●総括

研修成果は以下の3点である。一つ目は、豊富な地熱エネルギーが、温泉のみならず、様々な領域で活用されてきた歴史・現状を学習できたことである。1970年代のオイルショック後には、カルルス地区での調査が本格化したが、温泉観光地との利害関係もあり、実現には至らなかった。それでも、現在、国家的なエネルギー政策を背景として、再度地熱エネルギーの活用を検討する動きもみられている。また、温泉排熱を含む低温域廃熱を利用した融雪システムなど地熱エネルギーを活用した企業が展開している。二つ目は、資源賦存が市内のそれぞれの独自性を生み出したことである。登別市は幌別・登別・鶯別の3町（村）が1919年に合併して成立した町である。そのうち、幌別は、戦前の国内最大の硫黄鉱山、小幌鉱山を抱え、市の中心として発展して来た。小幌鉱山までは幌別駅からの鉄道もあり、幌別市街地は輸送上の結節点としても重要な役割を果たした。鶯別は重工業で発展した室蘭（夕張炭田の積み出し港）の後背地として、中小企業の立地やベッドタウンとして発展した時期もあった。さらに、登別は地熱エネルギーによる温泉観光地としての長い歴史を有する。このように、周辺地域も含めた鉱産資源分布が、市域毎の発展過程に差異をもたらした。



大林グリーンエナジーにて説明を受ける

最後に恵まれた日照条件等を背景として、メガソーラーの全市的展開が見られていることである。市の政策にも位置付けられており、建設時の地域企業の活用、災害時の市民への電力供給等、登別市の経済・社会において一定の役割を担っている。

学 生 研 修 記

三浦 勇
経済学科 2 年
札幌静修高校出身



再エネの普及促進における大都市と地方都市の違い

地域研修を終えて、強く印象に残ったことは、大都市自治体より小規模自治体の方が、地域経済政策としてより熱心に再生可能エネルギーの活用を行っていることが見えやすいということです。小規模なものであっても地域関連産業や地方税収にとってプラスになる面が多いからです。

人口がそこまで多くない地域だからこそ、現在に至っているという面も考えられますが、融雪システムは都市部こそ大きな効果が出るといいます。メガソーラーは、土地が必要なため、大都市やその周辺では難しいかもしれません。

また、資源の賦存やその利用によって、同じ自治体の中でもその発展プロセスに差異があることも深く学べたことです。昨年の地震の停電で、北海道の電力供給の欠点が浮き彫りとなりましたが、改めて資源面からの地域のポテンシャルに着目する必要があると感じました。

虎谷 遥花
経済学科 3 年
札幌啓成高校出身



印象に残った融雪システム

訪問した登別市では、太陽光発電が多く見られたことが印象に残りましたが、それ以上に、温泉地という土地の特徴を生かした他ではみられない地熱融雪システムという開発を行っていることに驚きました。温泉熱やその他の廃熱を利用し、道路の雪を溶かす簡単に言うとロードヒーティングで、経済にも環境にも優しいシステムです。地域の特性を生かしたエネルギー循環の考え方であり、去年訪問した安平町とはまた違う発見ができました。

実際に、開発された方々のお話を伺いながら、融雪システムを見せてもらうこともでき、とても貴重な経験となりました。

まだシステムは普及途上にあるようですが、地域循環型社会の実現に向けての取り組みとして参考になると思うので、さらなる普及が望まれます。有意義な地域研修であり参加してよかったなと思いました。

1部 内田和浩ゼミ I・II

参加学生数 17 名



内田 和浩
地域経済学科
教授



ひだか青少年自然の家にて

平取町のまちづくりに対する地域住民の意識 研修地：平取町

●研修目的

本地域研修では、昨年の平取町におけるまちづくりのリーダー 3 人への質的調査の結果を踏まえ、前期のゼミで学んだ量的調査法を用いて、地域住民のトマトを中心とする平取農業の現状に対する認識やまちづくりに対する意識を明らかにしようとした。

研修先・日程

- 8月20日 事前学習 (大学にて、アンケート調査用紙の印刷と地域研修全体の打ち合わせ)
- 8月21日 平取町内フィールドワーク (JAびらとり選果場)
平取高校生への集団アンケート調査 (平取高校)、平取高校1年生とのワークショップ (平取高校)
- 8月22日 平取町民へのアンケート調査① (町内3か所にて)
- 8月30日 平取町副町長講話 (平取町中央公民館)
平取町民へのアンケート調査② (雨天中止)

写真①びらとり農協選果場の見学。②平取高校でのアンケート調査。③平取高校1年生とのワークショップ。④遠藤副町長の講話



●総括

前期のゼミでは、「量的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から優れたまちづくりの実践を紹介し合った。そして、昨年の地域研修と同じ平取町で量的調査法による地域住民へのアンケート調査を行った。

初日には、「ニシパの恋人」出荷拠点であるJAびらとり第一選果場を見学しJA職員から説明を受けた。午後からは平取高校を訪問し、高校生全学年へのアンケート調査を行うとともに、一年生のクラスで「人口減少の問題点」をテーマにワークショップを行い、生徒たちの平取町への考え方を直接聴くとともに、大学生と高校生の交流の機会を持つことができた。

2日目は、終日平取町内3か所 (ふれあいセンター・Aコープ・「ゆから」) で町民へのアンケート調査を行った。時々雨が降るあいにくの天気も重なり、町民の方々に会うことが少なく、アンケート調査できた数は当初予定の三分の一以下であった。

3日目は、午前中中学のOBでもある平取町の遠藤副町長から、まちづくりに関する講話をいただいた。学生たちは、前日のアンケート調査で聞いた事などについて積極的な質問を行っていた。当初はその後、短時間であるがアンケート調査を引き続き行う予定であったが、昨日からの雨が続いており中止とした。

これらを通じて学生たちは、高校生を含む平取町に暮らしていく地域住民の皆さんと直接出会い、直接話を聞き、直接体験することで、「地域で暮らす」とはどういうことなのか、まちづくりの課題は何なのかを理解することが出来たと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。



町民へのアンケート調査

学 生 研 修 記

横谷 優多
地域経済学科 2 年
函館西高校出身



吉田 雄大
地域経済学科 3 年
札幌啓成高校出身



地域研修で学んだこと

僕たち内田ゼミ I・II は、昨年に引き続き平取町で地域研修を行いました。昨年は平取町の特産品でもあるトマトの独自ブランド「ニシパの恋人」の歴史について調査しました。そして今年は農業・トマト・まちづくりという3つの観点でアンケート調査を実施し、それらを年代・仕事などとクロスさせ集計を出してどのような因果関係があるのかを考察しました。その結果、課題として農業面で新規就農者への取り組みの認知がまだまだ低いこと、「ニシパの恋人」を町外にどのように発信していくか、まちづくりにおいて各世代のニーズに合わせた政策がより大事だということなどが上がりました。

このアンケート調査の他にも町内フィールドワークや平取高校の1年生と授業の一環として平取町の未来を考えるワークショップなども行い、3日間平取町とひたむきに向き合えるとても充実した研修となりました。

平取町の地域研修を終えて

今回の地域研修で1日目は平取町内フィールドワークで、JAびらとり選果場を見学し、職員の方から平取町のトマトの概要等をお聞きしました。その後は平取高校で学生を対象にアンケート調査と、平取町に住み続けるために必要なものとは何か考えることを題材にしたワークショップを平取高校1年生と行い、高校生からは実際に平取町に住んでいるからこそその意見が目立ちました。

2日目は町民へのアンケート調査を実施し、当日は平日の日中で悪天候も重なり目標集計数を下回りましたが、平取町の現状について考えている町民が多いおかげで貴重な意見が集まりました。

3日目には副町長の講話があり、最後にはアンケート調査の回答をもとに質問をしました。

昨年、今年と2度の地域研修で平取町を訪問することで町の現状や課題などが深い部分まで見えることが出来ました。

2部 内田和浩ゼミ I・II

参加学生数 16 名



内田 和浩
地域経済学科
教授



京都市中央市場にて

京都を訪ねる観光客のアイヌ文化に関する認知度

研修地：京都市

●研修目的

本地域研修では、昨年の平取町二風谷における質的調査の結果を踏まえ、前期のゼミで学んだ量的調査法を用いて、アイヌ民族の人々の伝統・文化等について、日本最大の観光地・京都に集まる観光客はどのように理解しているのかを明らかにしようと考えた。

研修先・日程

- 8月9日 事前学習（大学にて、アンケート調査用紙の印刷と地域研修全体の打ち合わせ）
- 9月17日 「京都市の観光政策と観光客の実際」京都市観光局 MICE 推進室職員からの聞き取り調査（京都市観光協会）
「京都錦天ぷら酒場たね七」（烏丸四条）にて全体ミーティング・懇親会
- 9月19日 観光客へのアンケート調査（清水寺・三十三間堂）
「都野菜 賀茂 烏丸店」（烏丸四条）にて夕食会
- 9月19日 「京都と昆布」について（京の食ミュージアム・あじわい館）

写真①京都市観光協会にて。②③④アンケート調査・三十三間堂。⑤アンケート調査・清水寺。⑥夕食会。⑦あじわい館



●総括

前期のゼミでは、「量的調査法の基礎」を学び、地域研修では京都市を訪れた観光客に、量的調査法によるアイヌ民族の伝統・文化等についてアンケート調査を行った。

初日には、京都市観光協会を訪問し、「京都市の観光政策と観光客の実際」について京都市観光局 MICE 推進室職員からお話を伺った。その後、夕食をしながら全体ミーティングを行なった。

2日目は、終日京都市内2か所（清水寺・三十三間堂）の観光地で、観光客へのアンケート調査を行った。日本人観光客より多い外国人観光客に圧倒されながらも、予定していた数値に近い488人からアンケート調査することができた。夕食は「都野菜 賀茂 烏丸店」で、京野菜やおぼんざいを食べ京都の食文化を体験した。

3日目は、京都市中央市場にある「京の食ミュージアム・あじわい館」を訪問し、「京都と昆布」等、京都と北海道の食文化の関連について説明を受けた。

これらを通じて学生たちは、観光地・京都の現状を理解するとともに、北海道と古都・京都との関連について知ることができた。アンケート調査では観光客のアイヌ民族・文化の認知度を理解することができたと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学生研修記

熊木 彩乃

地域経済学科 2 年
貝知安高校出身



地域研修を終えて

私たちのゼミは、2泊3日の日程で京都市を訪問し、京都の観光政策の今、京都を訪れる観光客のアイヌに対する理解度、京都と北海道の食文化のかかわりの3つを研修のテーマとして活動してきました。

1日目は京都市観光協会にて観光の盛んな京都が抱える観光課題とその対応や対策などの取り組みについてお話を聞きました。2日目は京都の観光地で多くの観光客にアイヌ民族や文化、観光に対する意識調査をアンケートを作成し実施しました。3日目は京の食ミュージアム・あじわい館で、古くから京料理に用いられている北海道の昆布の存在や京都の食文化の歴史について学びました。

事前学習やアンケートの作成、データの集計やまとめ作業など大変でしたが、楽しく充実した地域研修でした。今回の研修で学んだことを活かして、さらに知識を深めていきたいです。

三浦 雄平

地域経済学科 3 年
旭川龍谷高校出身



京都での地域研修について

私は9月17～19日に2泊3日で京都市へ研修に行きました。

昨年度は平取町でアイヌ文化の伝承活動を行っている方に聞き取り調査を行い、今年はアイヌ民族に対してどれほど興味や関心、理解しているかを全国から多くの観光客が来る京都で明らかにするために京都へアンケート調査を主に取り組みできました。

アンケートを作るということは自分が思っていたよりも意外と難しく完成させるのでさえ苦労しましたが、現地でアンケートを取るということはそれ以上に難しかったです。ただ、慣れてきてからは要領良く観光客の人達と楽しく活動できたので良い経験になったと感じています。

他にも観光についての課題やそれに対する取り組みについて聞いたり、京料理についてお話を聞いたり京都だからこそ学べたことも数多くあったので、有意義な研修になったと思います。

1部

佐藤信ゼミ I・II

参加学生数 19 名



佐藤 信
地域経済学科
教授



小林篤一翁顕彰記念公園にて

南空知地域の地域資源と先進農協の歴史・現在

研修地：美瑛市・三笠市

●研修目的

南空知地方は、北海道における大稲作地帯として知られ、また歴史遺産である炭鉱、鉄道などの「地域資源」も存在している。峰延農協については南空知の3つの市を圏域としており、また北海道でも歴史のある協同組合として知られている。研修では、峰延農協が展開する南空知を対象とし、農協の取り組みを知るとともに炭鉱や鉄道遺産の「地域ブランド化」の動向を学ぶこととした。

研修先・日程

9月10日～11日 JA 峰延（美瑛市）
三笠市立博物館（三笠市）
三笠鉄道記念館（三笠市）
アルテピアッツァ美瑛（美瑛市）

●総括

JA 農協は、美瑛市、岩見沢市、三笠市にまたがって組合員が存在しているという北海道では珍しい総合農協である。地域研修では、JA 峰延を訪問し、組合長みずから農協の沿革を説明してもらうとともに、二宮尊徳の報徳精神が現在の農協運営にも活かされていることを教えてもらった。特に、2名の本学卒業生が職員として勤務していることもあり、農協の仕事内容や在学中に学ぶべきこと、資格取得などに関する意見交換を行うこともできた。北海道の中でも高齢化と人口減少がすすむ空知地域でもあり、後継者対策についての学生の関心が高いように感じた。

翌日午前は三笠市立博物館や鉄道村を訪問した。三笠市全体が「ジオパーク」としての認定を受けており、開拓の歴史をはじめ、化石や地層などの自然学習もできる。学生たちは個々の関心にそって視察をしていたが、他の場所では見ることでできない鉄道遺産について特に興味を示していた。午後に訪問した安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美瑛と併せて、南空知地域の地域資源が何であるかを体感したように思われる。

地域資源は、雪や景観、地下資源などの天然資源に加えて、それらに手を加えた産業（過去も現在も含めて）も併せて地域に存在する。これらを活かし、南空知における地域ブランドの確立によって人を呼び込む効果を生む可能性があることが伺えた。

学 生 研 修 記

中山 朝陽

地域経済学科 2 年
滝川西高校出身



南空知の地域研修を終えて

私達は、北海道でも伝統的な協同組合として知られている峰延農協と、「地域資源」の学習のため、博物館や鉄道村、資料館などを視察した。峰延農協では、北海道を代表する農協に至った歴史を知ることができた。また、通常総会資料や、中期経営計画などの資料を頂き、峰延農協の具体的な取り組みや課題について学ぶことができた。課題として「後継者不足」があげられた。後継者不足に対して、婚活パーティーの開催など色々な対策をしていることも知った。今後も伝統的な峰延農協を継続するにあたり、課題や問題点も含め、役員（職員）が一体化して、更なる高みを目指していた。南空知の「地域資源」としては、三笠市や美瑛市に鉄道村や博物館がある。広大な面積を誇る北海道の中でも、空知にはこれほどの地域資源が存在していたことを目にするのができ、資源の多さを感じた。地域研修を通して、空知の更なる発展の可能性を感じた。

水口 淳翔

地域経済学科 2 年
旭川南高校出身



地域研修を終えて

私たちは、JA 峰延、三笠市立博物館、三笠鉄道記念館、安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美瑛を訪問しました。

JA 峰延は「一圓融合」という言葉の基、日々農家の方々を中心に地域と関わり合うために、農家の幸せや後継者を増やすための「婚活パーティー」を企画していました。月1回の常会は「有機的に結びつく」、「互いの肌の温もりを感じられる距離で集まる」ことを、テレビ電話があるこの時代にも徹底してこだわっていらっしゃることに感銘を受けました。また、JA 峰延の店舗（スーパー）が経営危機に陥った際、コープさっぽろと業務提携をし、組合員に対しての生活事業の充実化を図ったとのことをお聞きしたときは、自分もコープさっぽろでアルバイトをしていることもあり大変関心を持ちました。

三笠鉄道記念館には、歴史等を説明するパネルの他に、鉄道車両の仕組みを見やすくした模型や、実物のエンジンや信号機も展示されていて、日常でも利用する交通機関の普段見えない所を見ることができた貴重な経験になりました。

物のエンジンや信号機も展示されていて、日常でも利用する交通機関の普段見えない所を見ることができた貴重な経験になりました。

写真① JA 峰延で説明をうける。② JA 峰延内で真剣に話をきく学生たち。③ JA 峰延の生活店舗。④ 三笠市立博物館で説明を受ける。⑤ 美瑛市のアルピアッツァ（廃校を美術館へ活用）。⑥ かつての校舎の丸窓から公園を覗く



2部 佐藤信ゼミ I・II

参加学生数6名



佐藤 信
地域経済学科
教授



陽だまりの家にて

大きな協同、小さな協同の取り組み事例を探る

研修地：北広島市・恵庭市

●研修目的

既存の協同組合が規模拡大をすすめるなかで、小さな協同による地域貢献活動が注目を集めている。また大手協同組合であっても何らかの地域貢献を始めている。本研修では、農業団体による消費者と生産者を繋ぐ取り組みとしてホクレンくるるの杜（北広島市）、地域住民の居場所の創出に向けた取り組みを知るために NPO 法人陽だまりの家（恵庭市）を訪問した。

研修先・日程

9月6日 ホクレンくるるの杜（北広島市）
NPO 法人陽だまりの家（恵庭市）

●総括

2部ゼミ I・II の地域研修テーマのキーワードは「大きな協同、小さな協同」である。大きな協同とは協同組合の中でも合併や統合をすすめている既存協同組合のことを意味する。他方、小さな協同とは、小さな協同組合を指すのではなく既存の協同組合において取り組まれている新たな組織活動も小さな協同であるし、NPO 法人や諸団体による活動も小さな協同となりうる。

こうした問題意識を有して2部ゼミでは、ホクレンくるるの杜とNPO 法人陽だまりの家を訪問した。くるるの杜は「巨大商社」とも呼ばれるホクレンが2010年にオープンした農場やレストラン、直売所などを擁する施設である。大きな協同組合であってもくるるの杜を通して消費者と繋がろうとする意欲が感じられた。NPO 法人陽だまりの家は、恵庭市内の住宅街にある開始したばかりの組織である。協同組合と無関係とも見えるが、事業の一つであるきものプロジェクト陽では、古い着物の布地を再利用し、トートバックや小物入れなどの製品を協同組合で販売している。北海学園生協で販売している北海オリジナルブランドもその一つである。社会的弱者の居場所づくりとしての協同の取り組みが協同組合との協同にも波及し、地域社会への貢献を行っていることが窺えた。

学生研修記

山本 真実

地域経済学科2年
平岸高校出身



渡部 凌

地域経済学科3年
札幌静修高校出身



もっと学びたいと感じた地域研修

私たちは、くるるの杜と陽だまりの家を訪れました。陽だまりの家の理事長を担っている古山さんの話を伺っていると、ほかの地域にもあるであろう恵庭市の問題点を知ることができました。特に、高齢者、働いていない若者や子供たちの活動の場や居場所を作り上げている様子はとても勉強になりました。現状を知り、なぜこのような問題が起こっているのかを考え、その問題の解決の糸口を探し出そうとする積極的な考え方にも感銘を受けました。くるるの杜が所属するホクレンは、「つくる人を幸せに、食べる人を笑顔に」というコーポレートメッセージを掲げています。このメッセージの通りに、くるるの杜では、体験型農業や農村レストランなど、生産者側、消費者側、両方の体験をすることができるため、食と農業のつながりを、身をもって体験できます。これらの活動により人々がどのように感じ、どのように地域へ広まっていくのか、学びたいと感じました。

地域研修を終えて

最初に訪問したくるるの杜は、体験農場や調理加工体験などを通じて、消費者と生産者を結ぶ「食と農のふれあい広場」を実現しようとするホクレンの施設の一つです。ここで目指されている食と農のつながりは、一次産業人口の減少や、日本の食品廃棄問題への解決の糸口であるとともに、近年注目されているCSR活動やSDGsへの貢献にもつながる非常に有意義な取り組みであり、とても勉強になりました。

次に、NPO 法人陽だまりの家に訪問しました。ここでは、子ども食堂や塾などを通じた子供の居場所の創造、また高齢者の居場所づくりにも取り組むなど、地域の居場所づくりに取り組んでいました。また、きものプロジェクトを通して、働いていない若者の雇用を行うなど、地域の課題やニーズを発見し、解決に向けて行動していく力にとっても感動したと同時に、見習っていききたいと思いました。

最後に、この二か所の訪問は本当に勉強になることばかりで、私たちのゼミのテーマである非営利組織について、実践的に実態を知る良い機会となりました。

写真①くるるの杜のレストラン裏。②くるるの杜で所長から説明を受ける。③くるるの杜のレストランでは各種漬物がおかれている。④くるるの杜の直売所。⑤陽だまりの家の古山理事長から説明を受ける。⑦着物の端切れを活用した作品たち（陽だまりの家）



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

1部・2部

川村雅則ゼミ I・II・III

参加学生数 1部 12名・2部 13名



川村 雅則

経済学科
教授

札幌地域労組事務所の入る北海道自治労会館前にて

学生アルバイトをめぐる問題 労働組合、労使関係

研修地：札幌市

●研修目的

例年同様、(1) 学生アルバイトをめぐる問題を明らかにして、問題の解決策をさぐった。1部と2部それぞれで調査活動を行ったほか、『学生アルバイト白書』をコンパクトにまとめた『パンフレット』も作成した。(2) 働く際の労働契約の大切さと、労働条件の決定は労使が対等の立場で行うものであることを、労働組合からの聞き取りで学び、『学校で労働法・労働組合を学ぶ』にまとめた。(3) 今年は、労働組合だけでなく、自治体議員や弁護士など、問題解決に取り組む多様な人びとから話を聞く機会を設けて、物づくりに反映させた。

研修先・日程

- 前期 若者の雇用や労働法、日本の学費・奨学金に関する学習。
3年生は、日本学生経済ゼミナール大会(以下、インゼミ大会)への参加準備を開始。研究テーマは、「日本の働き方と世界の働き方」に設定。
問題解決に地方議会が果たする役割について、くましろちかこ石狩市議会議員からレクチャーを受ける。
- 夏季休暇 札幌地域労組の事務所を訪問して、労使関係・労働組合について学ぶ(8月29日)。伺ったお話と提供された資料を再構成して『学校で労働法・労働組合を学ぶ2019』をまとめる。
『学生アルバイト白書2019』作成作業に着手。
- 後期 北海道学生を対象としたアンケート調査を実施(10～11月)。
10月24日、奨学金問題に取り組む西博和弁護士の事務所を訪問して、レクチャーを受ける。
3年生は、新潟大学で11月30日に開催されたインゼミ大会に参加。
『学生アルバイト白書2019』と『パンフレット』を発行。

写真①札幌地域労組での研修風景。講師は副委員長鈴木一さん。②札幌地域労組では外国人技能実習生問題にも着手。③学生からも質問。④休憩中。終日の研修でちょっと疲れが。⑤問題解決に地方議会の果たす役割は？(くましろちかこ石狩市議会議員との交流)。⑥奨学金問題に取り組む西博和弁護士からレクチャーを受ける。⑦研究成果を携え新潟大学で開催されたインゼミ大会に参加。⑧討論を終えて福岡大学の学生と

●総括

(1) 今年の『学生アルバイト白書2019』は、アンケート調査の結果を中心にまとめた。1部、2部ともに、集めることができた調査票の部数が多く(有効回答は、1部で910人、2部で274人)、集計作業にお時間を要する設問もあるため、中間報告書的な位置づけで発行した。

(2) 経済的な事情が背景にもあって、学生の多くがアルバイトをしており、なおかつ、授業時間数を超えるほどに長時間働いているものの、契約(労働契約)を結ぶという感覚が乏しかったり、基本的な労働条件・制度について知らずに働き始めているところが気になりである。

今年の1部のアンケート調査では、アルバイトを辞めた経験を尋ねてみた。現在のバイトが続けられているのは、労働条件に比較的問題が少ないか、全くないのに対して、辞めたバイトでは少なからぬ問題が経験されているのではないかと考えたからだ。

結果は(図1)、まず辞めた経験のあるのは46.9%に及ぶ。そして、辞めた理由で最多は「自分の都合」であるものの、一方で、「賃金・労働条件」や「人間関係」にも少なからぬ回答があげられている。その中には、明らかに法律の反するものも散見される(別記参照)。加えて、「自分の都合」に回答された中にも、「賃金・労働条件」「人間関係」問題がからまって離職に至っているように読めるものもある。詳細な実態把握や問題発生背景の解明が課題である。

(3) アルバイトをめぐる問題に加えて、学費負担や奨学金利用に関する調査・研究にも力を入れている。貸与型の「奨学金」は、返済を必要とする「借金」であると認識する必要がある。

学生研修記

大志田 里咲
経済学科2年
旭川西高校出身



地域研修を終えて

今回の地域研修では、札幌地域労組の事務所を訪問して、副委員長の鈴木一さんから、日本の職場で実際にどのような問題が起こっているのかなど詳しくお話を伺いました。労働組合というものがどのような活動を行っているのか、今まで全く知らなかったのですが、今回の地域研修を通して、地域労組という組織は、その地域にとってなくてはならない存在であることを学びました。鈴木さんのお話で聞かれた「程度の差はあるがどの企業もブラックだと思ったほうがよい」という言葉で、ブラック企業に勤めないことが大事だと今まで思っていた自分の考え方は大きく変わりました。本当に大事なことは、自分がトラブルに直面した時に協力してくれる組織が身近にあるということを知識としてしっかりと身に付けておくこと、そして、それを周りの人にも発信していくことなのではないかと思いました。

佐野 宏太
経済学科2年
岩見沢東高校出身



知識と対処方法を知る

私たち川村ゼミでは、日本の労働問題や学費・奨学金問題について学んでいます。労働組合や労使関係についての理解を深めるために札幌地域労組の事務所を訪問し、副委員長の鈴木一さんから、昨年組合を結成した病院の事例や、外国人技能実習生の問題を中心にお話を聞きました。

お話の中で鈴木さんが強調されていて印象的だったのは、賃金など労働条件は使用者と労働者が対等の立場で決定するという「労使対等決定の原則」、「使用者は一方向的に就業規則を不利益に変更できない」といったことです。研修を通して、このようなことを知識として身につけることの重要性を学ぶと同時に、自分がこれから社会に出て職場でなんらかのトラブルに直面したときに、きちんと対応できる知識や方法を知っておくことの大切さを学びました。



①



②

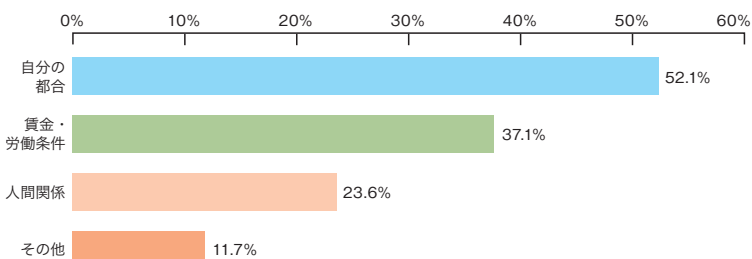


③



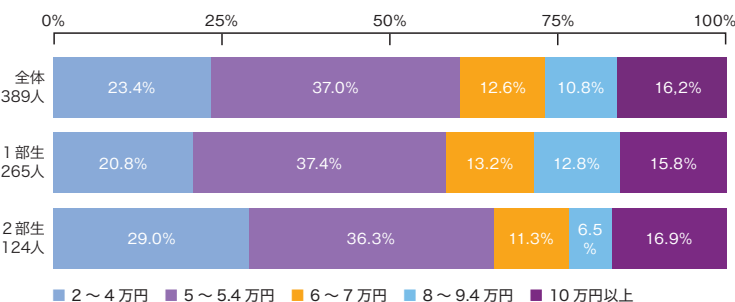
④

図1 アルバイト（単発のアルバイトを除く）を辞めた経験の「ある」のは全体の46.9%、そのうち「賃金・労働条件」を理由とするものは37.1%、「人間関係」23.6%



※対象は1部生のみ。回答数は420人【複数回答可】。

図2 日本学生支援機構の奨学金（第一種、第二種）を利用している者のうち、利用金額の合計が月8万円以上（4年間で400万円弱以上）の者が4人に1人強（27.0%）



▼『学生アルバイト白書2019』



▲『学校で労働法・労働組合を学ぶ2019』

アンケート調査の結果によれば、日本学生支援機構の奨学金利用金額は、第一種と第二種を合計すると、月8万円以上が利用者全体（金額不明の者を除く）の4人に1人強に及んでいる（図2）。4年間で400万得弱（384万円）以上という計算になる。就職状況の改善が言われるものの、一方で、非正規雇用・長時間労働など安定して働き続けることが困難な状況も広がっている。借りた奨学金は果たして返済しきれののだろうか。返済できなくなった場合どうなるのだろうか——そのような疑問を解消するため、奨学金問題に取り組む西博和法律事務所を訪問し、奨学金裁判の実際や問題解決のための社会的な取り組み、政治への働きかけなどを学んだ。

（4）例年同様、札幌地域労組を訪問し、労働契約や労使関係・労働組合の重要性について、具体的な相談事例や取り組みにもとづきながら学んだ。今回『学校で労働法・労働組合を学ぶ2019』にまとめたのは、退職金の引き下げ提案を契機に労働組合を結成したある病院労組の事例である。この事例では、労組結成後、団体交渉を通じて問題の解決を図り、同時に、労働組合が職場に根付くことによって風通しのよい職場作りが確実に進んでいるとのことである。職場に組合がなくても、地域の労働組合に駆け込んで問題を解決することが可能であることや労働組合の多面的な意義について学生たちは理解したと思う。

→ <http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index> からダウンロード可

アルバイトを辞めた理由（自由記述）の一部

「賃金・労働条件」系

忙しさと賃金が割に合わなかった。／タイムカードを押してからでも働かされるのが嫌だった。／22：00移行割増賃金なし、22：30以降賃金出ないため。／人手不足のためアルバイトも本来複数で行うべきことも一人でやる作業が多い。／忙しさが時給に合っていない。／求人書に書かれていた時間通りに働くことができなかったから。／休み希望を通るのが難しく、最賃だったため。／時給が低くて暇な日は早上がりをさせられ稼ぐことができなかったから。／夜勤で働いて、週2～3程で面接時に頼んだが、ある時週6でシフトを組まれた。／バイトを初めて3日で契約内容が一方的に変更。／残業が多かったため。／賃金と労働内容があまりにも割に合わなかった。／休憩なしは当たり前。23時に終わると事前に言われていたが24～25時はザラだった。／忙しく、クレーム対応などの業務が多く、大学にも影響が出そうだったため。／バイトの応募と実際の場所で相違があった（主にシフト）。／労働条件の劣悪さゆえ。／休憩30分で1日11時間の労働。残業代も曖昧だった。／仕事を教えられずぶっつけ本番でまちがえたら怒られたり、とにかくブラックだった。／退勤時間がしっかりしてない。／最低賃金で10部屋（カラオケ店）以上のワンオペ、研修期間が極端に短かった。／当日いきなり2時間早く来てくれないと言われることが多くあった。／混んでるときもキッチンが1人というブラックだった。／月80時間以上という条件が苦しかったから。／残業代が支払われない。タイムカードがなく労働時間が記録されない。／早上がりや急にシフトの日に休みになったりして、安定的に稼げなかった。／希望時間に働けなく、賃金が安かったため。／シフトの自由度が低かった。賃金と業務が釣り合っていない。

「人間関係」系

パワハラ。／店長からパワハラ。／店員がひどかった。／休みをとらせてもらえず、プライベートのはなしばかり。／店長が自分は仕事をしないこと、バイトがミスをしたときの怒り方が異常だった。／社員が苦手だった。／心を病んだ。／アプリの導入で上司のパワーハラスメントがエスカレートし、精神的苦痛を負った。／店長の性格に嫌気が差した。／セクハラまがいのことをされた。／労働環境がバイト未経験者には厳しく、またそれをサポートする人間もあまり良くなかった。／勤務歴の長い女性店員からのいじめ。／店長による社員へのセクハラ、シフト変更の連絡が一切ない。／店長がアルバイトをいじめていた。／多忙な時間帯のシフトに入ると周りがイライラしているから辞めました。／店長がいつも誰かを悪く言って、バイト達もそれに乗っかる様子をよく見かけた。／先輩が厳しかった、残業代がでない。／現場で指示をする人間の態度（パワハラに近いことを何度か）。／バイトリーダーの人の性格が合わなかった。／仕事をさぼりたい上の人間がどんどん仕事を任せてくる。／悪口が頻発していたから。／身体的精神的な苦痛を与えられたため。／上司からのいじめ。社員数人からの嫌がらせ、SNS等へ悪口を書かれるなど。



1 部

徐涛ゼミ I・II

参加学生数 17 名



徐 涛
地域経済学科
教授



本学図書館にて

日中間の印象調査

研修地：千歳市・札幌市

●研修目的

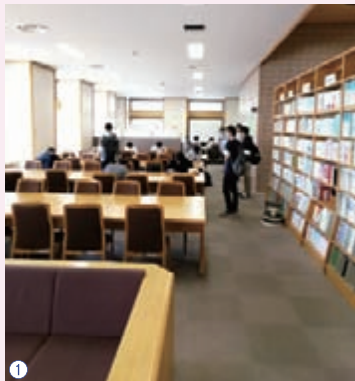
日中間の政府間交流が改善しつつあり、訪日の中国人観光客も伸びつつある。そのなかで、日中間の国民感情がどう変わったかについて、アンケート調査を実施した。

研修先・日程

9月26日 北海学園大学附属図書館
10月7日 新千歳空港

写真①～④大学での調査。

⑤～⑭新千歳空港での調査



●総 括

日中間の印象調査に関して、すでに「日中共同世論調査」があり、昨年で第14回目を迎えた。日本に対して「良い印象」と「どちらかといえば良い印象」をもっている中国人は、最悪の5.2% (2013年) から42.2%に上昇した。しかし、中国に対して同様な印象をもつ日本人は、最悪の6.8% (2014年) から13.1%にほんの少ししか改善していない。

近年、中国人の訪日がブームになっており、日中間の「草の根の交流」も少し増加しており、お互いの国の情報もメディアなどを通じて簡単に入手できるようになった。

なぜ日本(人)の対中感情がそれほど改善しないのか。日中の関係改善のためになにが必要なのか。一回の調査だけでは、これらの疑問に答えることができない。調査の結果、我々はあらためて歴史問題の重みを覚えさせられた。また、日本の若い学生たちが持っている、メディアの中国報道に対する絶大な不信感に驚いた。

日中関係の改善、互恵関係の構築、強いては東アジアの安定と繁栄の希望が託されている若い世代が、自ら本調査に挑んだ。そのことも、非常に有意義ではなかろうか。

アンケート調査メンバーの声 (地域経済学科2年)

●川内 康平 (データ分析チームメンバー)

空港のチェックイン前という忙しい時間帯なのに、快く協力してくださる方ばかりでした。そのうえ質問をじっくり読んで答えていて、人柄の良い方々だと感じました。外国語で会話をするのは思っていたより緊張して、自分の中国語はたどたどしかったですが、言葉が通じて調査用紙を受け取っていただくたび自信ができました。多くの外国人と関わるまたとない機会でした。

●大川 遼也

研修を行う前は、言語の異なる相手に自分がアンケートを取ることができるのか不安でいっぱいでしたが、実際に始めてみると、先生や先輩の用意してくださった短い文章を覚えるだけで十分に中国人相手に意思を伝えることができました。何よりも相手の中国人の方が理解してくれようと、こちらの拙い中国語に耳を傾けてくれたことが大きかったと同時にすごくうれしかったです。

千歳空港 調査班

●宮森 康平

中国人にコミュニケーションをとると、みんな快く引き受けてくださり、中国語で「また日本に来てください」と言う笑顔で反応してくれる人がたくさんいて、このような反応が私にとっては今の日中関係が良好なのかどうかについての一つの答えなのではないかと感じました。

●藤井 大生

なによりも中華系の方に直接触れたことで、とても優しく気さくな方々なんだと、より一層中国人の方々の印象がよくなりました。チェックインの時間や自分たちの時間もあるにもかかわらずアンケートに協力してくださった中華系の方々には本当に感謝しかありません。

●神野 拓真 (データ分析チームメンバー)

多くの方は快くアンケートに協力してくださり、多くの回答を得ることができてとても嬉しいと同時に、大きな達成感を得ることができました。

●小谷 陸矢

始めは声をかけることに躊躇していましたが、先輩や周りのゼミ生の頑張りをみて後押しされ、自分自身も一歩踏み出して声をかけることによって多くのアンケートを集めることに貢献できました。

学園図書館 調査班

●高島 和暉

今回の研修を通して感じたことは、恥ずかしがらずに声をかけるということ。これは何事にも言え、積極的に声をかけないと何も始まらないと感じました。





学生研修記



滝谷 優斗

地域経済学科3年
岩見沢西高校出身

地域研修を終えて

今年の地域研修は、北海学園大学の図書館と新千歳空港で行いました。主な地域研修の内容は、北海学園大学では学生に中国に対する意識調査、新千歳空港では中国人に日本に対する意識調査を行いました。どちらもアンケート形式での調査であり、事前にアンケートを作成し調査に臨みました。

北海学園大学での調査は、図書館を利用している方にご協力をいただき、多くの回答を得ることができました。また、学生の中に私たちの活動に興味を持ってくれる方もおり、励みになりました。

新千歳空港での調査は、事前にゼミの中で中国語の文章を練習し、実際に中国人に対し中国語で話しかけてアンケートを行いました。初めは緊張していましたが、多くの方が耳を傾けてくれ協力してくださいました。その時はとても嬉しく、大きな達成感を得ることができました。

今回の地域研修は計画の段階で失敗もありましたが、ゼミの仲間と一丸になって協力し合い、良い地域研修になったと思います。また、自分たちで計画を立て実行することは大変でしたが、達成した時に得られるものはとても大きく大切であると感じました。また、このアンケートに協力していただいた方に感謝するとともに、アンケートを集計し地域研修報告会で良い報告をできるように努力したいと思います。



金井 和晃

地域経済学科3年
静内高校出身

失敗から学んだこと

地域研修を終えてみて今回は、主体性をもって行動し地域研修に臨むことが出来ました。今年は先輩方とは違いどこで地域研修を行うか、いつ赴けばアンケートを多く取れることができるのかなどを先生の力もいただき、自分たちで一から計画をして行いました。計画途中で行きづまることも多々ありましたが皆で協力して計画を立てられたおかげで今回の地域研修も問題なく行うことが出来たのだと思いました。

リーダーシップをとり主体性をもって行動できたこと、これが今回、自分が大きく成長できた点だと思いました。昨年はグループ内の人数も多く先輩が率先してアンケート調査してくれたため、それに甘えて自分から行おうとせず積極性を欠いてしまう場面がありました。そのため今年は自分が先輩の立場として下級生を引っ張っていくことを心掛けて臨みました。

学園内の図書館で行った日本人を対象とした調査では予想以上に断られることが多く集めるのは厳しいかとも思いましたが、結果的に104枚のアンケートを取ることが出来ました。しかし、勉強している人などに対してアンケートをしても良いのか躊躇してしまう場面がありました。そのような場面でも躊躇せず、さらに工夫してアンケート調査を行うことが出来ればより多くのアンケートを取ることが出来たと思いました。日本人を対象とした調査ではそこが改善点であると感じました。

新千歳空港で行った中国人を対象とした調査では最初から断られることが多く、さらに相手の質問にも受け答えができなく、アンケートをしっかりと取れるか心配でした。しかし前回の失敗を活かし積極性をもって調査に臨みました。トイレ待ちをしている人やなるべく複数人である人達に聞くなどの工夫を凝らし、中国人を対象とした調査では多くのアンケートを取ることが出来ました。そして積極的に行動することで自ずとリーダーシップもとれるようになるということを身をもって体験をしました。

自分たちで考え、実行することはとても大変でしたが学んだことも多くとても貴重な経験をする事が出来ました。



佐々木 歩夢

地域経済学科3年
市立函館高校出身

新たな取り組み

私たち徐ゼミは学内・新千歳空港にて日本人の対中国、中国人の対日本への意識調査を実施しました。

今年度は、前年度まで実施していたインバウンド調査の結果から、日本人や政府の印象とインバウンドの満足度に相関関係をもたしている傾向がみられたことから、対日本、対中国への印象はどのようなものであるか、どのような理由により印象を左右するのかを新たなテーマに調査を進めました。変更を加えたアンケート調査は、言論NPOと中国国際出版団体が実施している「日中共同世論調査」をもとに、前年度まで行ってきたインバウンドについても加え、新たに作りました。アンケートを作成するにあたり、質問内容は適切であるのか、どのような内容がテーマを導き出せるのかはとても難しいものでした。

作成したアンケートを自分たちで協力をお願いし、回答していただき、データを集計し分析するということは大変なことではありましたが、とてもやりがいを感じることもともに、貴重な体験となりました。また、中国人へのアンケート調査は、中国語を用いて行いましたが、練習した中国語で会話することができ、多くの中国人の方との交流ができたことも貴重な経験であり、このゼミであるからこそ、できるものなのと感じました。

今回の地域研修を通じ、調査だけでなく、事前の計画や調べの重要性を改めて実感しました。前年度とは大きく実施場所、内容を変えたことによって起こりうる問題や、多くのデータをとれるような工夫など、予測して行うことは苦労しました。

今回の地域研修において、多くの方々のご協力により地域研修が成功に終わったことを心から感謝いたします。また、今回の調査が今後の調査に継続されることをうれしく思います。



1部 中園桐代ゼミⅠ

参加学生数2名



中園 桐代

地域経済学科
教授



地域研修報告会にて札幌連の役員の皆さんと

母子世帯の現状と奨学金問題

研修地：札幌市

●研修目的

ひとり親世帯の子どもの貧困率は54.6%と大人が2人以上いる世帯の貧困率12.4%を大きく上回る(2012年、厚労省)。この問題は「子どもの貧困」として認識され、全国では子ども食堂や学習支援といった子ども支援が展開されている。今回の地域研修では、子どもの貧困の背景にあるシングルマザーの貧困や当事者団体の活動を知り、子どもの進学の課題や必要な対応策を当事者団体の方々と一緒に考えることを目的とした。

研修先・日程

6月30日 札幌市母子寡婦福祉連合会・奨学金勉強会で報告
10月4日 札幌市母子寡婦福祉連合会理事長講演

写真①②奨学金勉強会での学生の発表
③④地域研修報告会での報告



①



②



③



④

●総括

日本のシングルマザーの特徴は「働いても貧困」であるということだ。就業率は8割を超えているのにも関わらず、平均就労収入は200万円(2016年 厚労省調査)しかない。この経済状況は子どもの進学にも影響し、厚労省によれば、全世帯の専門学校を含めた大学等への進学率が70.7%(2014年)であるのに対し、ひとり親世帯は41.6%(2011年)に過ぎない。

札幌市のシングルマザーの現状を学ぶため、当事者団体である札幌市母子寡婦福祉連合会(以下、札幌連)の理事長にその活動について講演して頂いた。長年にわたり当事者団体として就労支援や生活支援、そして子どもの進学のための事業を行政や企業と協力しながら幅広い活動を行っていることを学生は理解できたと思う。

そして、学生自身が大学生活に必要な経費(学費だけでなく、部活や就職活動等も含め)を調査し、また学生支援機構の奨学金制度を学び、札幌連の「奨学金勉強会」で報告を行った。参加者のアンケートで、卒業後の就職や奨学金の返済について不安を感じているシングルマザーが多く存在している事がわかった。アンケートで好評であったのが学生自身の家計やアルバイトの体験談であった。このような情報は「進学相談会」では得られないものであろう。大学生活の具体的なイメージを伝えることができたのも大きな成果であると考えている。

学生研修記

進学、奨学金問題と母子家庭の現状



松本 優菜

地域経済学科2年
帯広緑陽高校出身

私達は日本学生支援機構の奨学金制度を学び、6月に札幌連の方々やこれから進学を控えているお子さんを持つお母さん方に奨学金の仕組みと制度についてお話をさせて頂き、10月に札幌連の簡原理事長にレクチャーをして頂きました。調査では進学費用の高さ故に約2人に1人は学生支援機構やその他何らかの奨学金を借りて学生生活を送っていること、母子家庭は世帯収入が少なく進学が難しくなっていることが分かりました。対策としては早期からの進学費用準備や奨学金については保護者だけでなく返済する子供本人にも情報を知ってもらう為の勉強会の実施も大切になります。また、札幌連では母子家庭を支えるために奨学金制度を設けたり勉強を教える等、子供の為の支援が手厚く行われているのでこういったものも上手く活用しながら進学を諦めてしまう世帯が少しでも減っていければと感じました。

大学進学における母子家庭と奨学金問題について

私達中園ゼミは6月30日に本学で札幌母子寡婦福祉連合会の協力のもと、母子家庭の保護者の方向けに勉強会を行い、10月4日に札幌母子寡婦福祉連合会理事長にお越しいただき、自分たちも学習を行いました。



山崎 功太

地域経済学科2年
北海高校出身

6月30日に行った勉強会では、奨学金自体の制度や種類について説明すると共に実際に自分たちのデータを元に大学生活にかかるお金にまつわる話も織りまぜながら進学予定のお子さんを持つ保護者の方々の疑問や不安を解消するお手伝いをさせて頂きました。当日ご協力頂いたアンケートでは、「説明が分かりやすかった。」「実際に大学でかかるお金のイメージが具体的に抱けたので良かった。」といった感想を頂けたので、自分たちの奨学金に対する知識も深まったと共に実施して良かったなと感じることが出来ました。

10月4日の学習では、今度は自分たちが札幌母子寡婦福祉連合会理事長から奨学金に関する現状や問題をレクチャーして頂き、現状給付を受けてる身でありながら知らないことがまだあるのだと言うことを痛感したとともに改めて進学において経済的に困窮している母子家庭の方々を支える活動の重要性を再認識出来ました。

地域研修報告会では人数も他ゼミに比べて少ないということもあり、大変に思うことも多かったですが、先生方には褒めていただいた部分もあったので今年度の反省を生かして、来年以降の地域研修、ゼミ活動をより有意義なものにできるように励もうと思います。

1部 西村宣彦ゼミ I・II

参加学生数 26 名



西村 宣彦

地域経済学科
教授



豊頃町のシンボル・ハルニレの木の下で

学生との協働によるトヨコロ創生プロジェクト【後編】

研修地：豊頃町

●研修目的

前年度に引き続き豊頃町を訪ね、地元農家等に受け入れていただき、農業体験やインタビュー等を通じて、地域の魅力を探究・発信し、同町の地方創生への貢献を目指して取り組む過程の中で、実践知を修得する PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）として実施した。

研修先・日程

- 9月2日 豊頃町役場及びアイシン精機のレクチャー
町内視察（ハルニレの木など）
食事準備。受け入れ先との顔合わせ
- 9月3日 豊頃の魅力を探る班別プロジェクト ①森農場、②小笠原農場、③川口農場、④田頭農場、⑤相澤農場、⑥スライプハーツ、⑦お菓子の豊月、⑧サイクルツーリズム（ココロコ）、⑨飲食店取材（「とり良」石田「赤豚ラーメン」「きいちゃん食堂」）
町民の皆さんとの交流 BBQ
- 9月4日 大津漁港秋鮭定置網漁り揚げ作業の見学
（株）ELEZO 視察
秋鮭捌き体験&地元食材を使った調理実習
発表会プレゼン準備
- 9月5日 研修成果報告会

●総括

十勝発祥の地である豊頃町は十勝川下流域に位置し、畑作や酪農を基幹産業とする大規模農業地帯であるが、人口は3千人強と少なく、人口減やスーパー撤退による商業の衰退といった課題に直面している。農業後継者はいるが、配偶者の誘致は課題で、地元の若手が「豊頃団志」を結成し、地域プロモーション事業に取り組んでいる。近年は厳冬期に大津海岸に打ち上がる「ジュエリー・アイス」が注目を浴び、観光客は増加傾向にあるが、地域にお金が落ちる仕掛けづくりや、観光地としてのさらなる魅力向上が課題である。こうした課題を踏まえて、私たちは豊頃町の交流人口の拡大や移住・定住増の流れに寄与していくことを目指して、昨年度と同様、地域の仕事と暮らしの体験や、地元の方との交流・インタビュー等を通じて、地域の魅力を見つけるとともに、今年度は「豊頃の魅力と情報を発信する」という、アウトプットを強く意識しながら研修に取り組んだ。学生は豊頃の人達の温かさや札幌にない魅力に触れるとともに、それらを不特定多数の人々に見てもらうのに耐えるコンテンツとして、記事を制作・発信することの難しさも大いに学んだ。2年続けて学生達を受け入れていただいた豊頃の皆様に感謝申し上げます。



研修成果報告会での発表

学生研修記

本橋 京介

地域経済学科 2 年
大森高校出身



池森 千夏

地域経済学科 3 年
札幌北陵高校出身



全てが「新鮮」

行ったことのない地域で食べるもの、見るもの、地域の方々と関わることは、全て「新鮮」でした。私は酪農家の田頭さんが毎朝されている仕事を体験させていただいた時に、想像とは違い、仕事の大変さを実感できました。このような新鮮さを感じることができたのは、受け身ではなく、主体的に体験、コミュニケーションをすることができたからだと思っています。

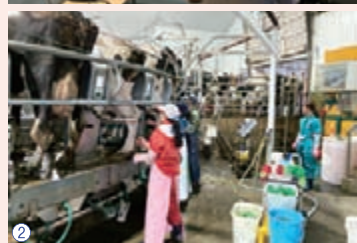
コミュニケーションの中で、新たな発見、疑問を見出すことができます。地域の皆さんが日常だと思っていることが、私達にとっての魅力でした。そのため地方創生の課題点として、魅力を発信することはまだまだ足りてないと感じました。

研修を通して、私はこの大変な作業を毎日行っている農家の方々に感謝しなければならないと思いました。そして食事をしている際に、生産者の思いを感じながら日々過ごすようになりました。

魅力あふれる温かいまち、豊頃町

私は畑作農家の川口農場で、大型のハーベスターに乗って大量のじゃがいもを選別し、出荷先のカルビーの工場にも同行しました。ハーベスターを何度も乗り降りし、大きく揺れるハーベスターの上で選別作業をする際には、目を凝らして頭も使うため、乗り物酔いしてしまうなど大変でした。しかし受け入れてくれた川口家の皆さんの温かい人柄のおかげで楽しく作業できました。家族経営をされていることもあり、アットホームな雰囲気でお仕事ができることに魅力を感じました。私が体験したのは1日だけでしたが、収穫期は毎日大変な作業をされていることを尊敬しました。また冬になると旅行に行ったり副業もするなど、思ったより自由度の高い暮らしであり、メリハリがあることにも魅力を感じました。また、生産者として安全なものを届けたいという思いがあることも教えてくれました。豊頃町は魅力あふれるまちです。

写真①宮口孝豊頃町長から歓迎のあいさつ。②相澤農場で酪農体験。③「お菓子の豊月」でお菓子作り体験や新たなお土産スイーツ作りに挑戦。④小笠原農場でのじゃがいも収穫体験。⑤大津漁港で秋鮭水揚げの見学。⑥秋鮭捌き体験



2部 西村宣彦ゼミ I・II

参加学生数8名



西村 宣彦

地域経済学科
教授



昼食休憩に立ち寄ったサーファーの聖地・浜厚真の海岸

ローカル・ベンチャーと地方創生

研修地：厚真町

●研修目的

厚真町の特徴ある地方創生の取り組みである「ローカル・ベンチャー・スクール (LVS)」について詳しく学ぶとともに、実際に厚真町へ移住・起業した方々にインタビューし、地方移住の可能性や魅力を探った。併せて北海道胆振東部地震の被害や復興の状況も視察した。

研修先・日程

- 9月12日 厚真町移住者インタビュー（西壁将世さん、村上巧さん、田中克幸さん）
厚真町役場・佐々木悠介氏からレクチャー
昼食：「試」のカレー、夕食：あづまジンギスカン交流会
- 9月13日 厚真町移住者インタビュー（中川貴之さん、上道恵さん）
胆振東部地震による山腹崩壊の復旧工事現場の視察
株式会社エーゼロ厚真の花屋雅貴氏からレクチャー
振り返りとまとめのミーティング

写真①馬搬業を営む西壁将世さんにインタビュー。
②サーフショップを営む移住者・村上巧さんにインタビュー。
③夜は厚真町の皆さまとの交流ジンギスカン。
④木材加工業を営む移住者・中川貴之さんにインタビュー。
⑤地震による土砂崩れで倒壊した浄水場施設。
⑦放課後子ども教室を運営する移住者・上道恵さんにインタビュー



①



②



③



⑤



⑥



⑦

●総括

多くの自治体が人口減を食い止めようと移住・定住の促進に取り組んでいるが、厚真町は「地域での起業支援」という、道内ではあまり例のない独特の手法で、成果を上げてきた。岡山県西粟倉村を拠点に活動するエーゼロ(株)と提携してLVSを運営し、厚真での起業を志す者を広く募集し、彼らの起業を全面的にサポートする。LVSの最終選考に合格すると、地域おこし協力隊に採用され、厚真で3年間、最低限の所得保障と活動費の支給を受けながら、事業を軌道に乗せることに専念できる。地域おこし協力隊制度のこのような形での活用は珍しい。私たちはLVSを経て移住した方々や、LVSとは別ルートで移住された方々にお会いし、移住に至ったそれぞれの経緯や思いを伺った。

地方でも仕事はできるし、都会では得られない満足感や面白さもある。そして何より彼らの思いを理解し、陰に陽に支えてくれる厚真の人達の存在が大きいことがわかった。大地震の爪痕は1年を経た今も生々しく、復興にはまだ相当時間がかかるが、厚真町の挑戦に今後も注目したい。最後に研修をアレンジ＆アattendしていただいた厚真町役場の宮久史さんはじめ、厚真町の皆様に心から感謝申し上げたい。

学生研修記

石橋 直弥

地域経済学科3年
苫小牧南高校出身



知ってるつもりで知らなかった地元・厚真の魅力

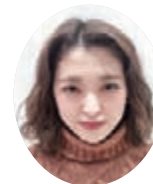
今回私たちが行った厚真町は僕の地元で、自分の地元で地域研修に行くのは、不思議な感覚でした。また、「自分の地元だから知ってることだらけであまり意味ないかな～」なんて思っていました。でも、そもそも今回の研修の軸でもある、「ローカルベンチャー・スクール」のことすら知りませんでした。

今回の地域研修では、いろんな場所や人を紹介してもらいました。出会ったことのない人、行ったことのない店、子供の頃に行った浜辺は、今になっていくと想像以上に良い場所でした。自分の地元でも知らなかった魅力を本当にたくさん感じました。

地域研修に行って思ったことは、違う視点から自分の地元を見ると、自分の知らない魅力を感じることができると実感しました。きっとこれは、いろんな人に共通するのではないかと思います。また将来、自分の町がどう変わるのか楽しみです。

大野 茉莉

地域経済学科3年
北見緑陵高校出身



復興に取り組むローカルベンチャーの町

私たちは厚真町でローカルベンチャーの生き方や考え方を他人事としてではなく、自分事として学んだ。都市に集まる多くの若者と同様、私自身も将来都市部で就職するものと考えていたが、厚真に移住・起業した方々の話を聞き、地方で住む魅力、そして知らなかった厚真の魅力を発見することができた。厚真では町の住民や役場職員と移住者の関係がよく、移住や起業をしやすい環境が整えられていた。

また2018年に起きた北海道胆振東部地震の被災・復興現場も訪れた。土砂崩れが起きた山の斜面や倒壊した浄水場の建物など生々しい傷跡が残る、復興はまだ道半ばだと知り驚いた。しかし私達がお会いした厚真の方々は誰も後ろ向きな話をせず、明るく厚真にける思いを話してくれた。テレビや新聞などのマスメディアでは胆振東部地震の報道は少なくなったが、風化させないことが必要だと感じた。

1部 濱田武士ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生 27 名



濱田 武士
地域経済学科
教授



大雪山展望台にて

人を惹きつける東川町の魅力

研修地：東川町

●研修目的

東川町は「写真の町」として知られ、また「ふるさと納税」のしくみを活用して町の応援者を増やす「株主制度」を創設するなど、特徴ある「まちづくり」を行っている。この「まちづくり」と関連して、なぜ東川町では 30 年間人口が増え続けたのかについて検証する。

研修先・日程

- 8月26日 写真文化首都－東川町役場 町長講演、町内視察
8月27日 大雪山旭岳源水、大雪山旭岳ロープウェイ乗車と散策、せんとびゅあIの見学
8月28日 移住者との面談

写真①松岡町長による講義。②東川小学校校舎内で安田侃氏の作品。③大雪山旭岳。④公有化した織田コレクション。⑤⑥せんとびゅあ敷地内に飾られた作品。⑦移住者に対するインタビュー



●総括

東川町は、旭川市に隣接しており、都市機能を楽しむ居住環境であると同時に大雪山や田園風景などの景観やおいしい水があるという物的自然環境に恵まれ、写真文化、芸術作品、木工などクラフト文化、食農文化、スポーツ文化をリスペクトして「写真甲子園」など様々な催しや展示を通じて本物に触れることができる空間を創出してきた。なかでも東川小学校は、近代芸術的な建築物になっており、地元の木工職人によって制作された机や椅子が沢山あり、校内には彫刻家安田侃氏の石造作品など様々な芸術品があり子供たちが触れることもできる。さらに、町が日本語学校を運営するなど国際交流・教育も盛んである。

人口増の背景には、「グリーン・ビレッジ」という静かな住宅地の造成の影響もあるが、自然、農と木工の伝統文化を大切にしながらも、写真、芸術、国際性、日本語教育、株主制度という新たなプラットフォームを創造することで人を惹きつけてきたことが大きい。こうした「まちづくり」は、役場に「東川スタイル課」を設置するなど、新たな取り組みを嫌わず、町民や移住希望の声に必ず耳を傾ける、型破りの行政の対応があって実現できたと推察される。

学生研修記

石井 遥輝
地域経済学科 2 年
札幌稲雲高校出身



「適疎」をめざすために

東川町長や役場職員の方々の話を聞いて、わかりやすく力強い言葉、印象に残る言葉が多かったです。例えば、「行政に必要な 3 つの力＝直観力、決断力、実行力」、「3 つの『無い』からの脱却＝前例がない、ほかの町にない、予算がない」などです。また町行政の窓口が非常に広く移住者の方が働きやすい環境を創出し、ただ人口を増やすだけではなく在住者はもちろんのこと移住者の生活を充実させる工夫が目にとることができました。過疎問題は人口対策をもって解決させるというのではなく人口が増えた後に「適疎」をめざし住民たちの生活環境を充実させることまで考えて初めて、解決に向かうのだと感じました。そのベースには、「まちづくり」のスパイスとなり切っても切り離せないものとして東川特有の「写真文化」や、その景観となる大雪山系の広大で豊かな自然があるのを知りました。

久万 貴央
地域経済学科 3 年
市立函館高校出身



「写真の町」東川町から学んだまちづくり

今年度の研修では、大学などの研究機関から多くの視察が訪れる東川町を訪れました。東川町は 1985 年に「全町民が参加し、後世に残し得る町づくり」を実現させるため、「自然」「文化」「人と人の出会い」を大切にしている町として「写真の町宣言」を行い、現在では高校写真部の全国大会である写真甲子園の開催地となっており、「写真の町」としての個性や独自性が確立されています。町の行政政策において東川町職員は「公務員のプロ」と言われており、自治体と民間企業の連携・公立日本語学校での外国人留学生の受け入れ・小学校での教育環境の向上など、柔軟で多様な行政政策を行っています。

実際に東川町に訪れた際のヒアリングでは、商工会会長の浜辺さんから、かつて行政で働いていたころのお話を聞くことができ、現在の町づくりに至るまでの取り組みの大変さを実感することができました。

2部

濱田武士ゼミ I・II・III

参加学生数 13 名



濱田 武士

地域経済学科
教授

かまい岳ビレッジコテージ前

超高齢社会・人口減少下で歌志内市は地域をどう支えているのか？

研修地：歌志内市

●研修目的

歌志内市は市内の炭鉱が全て閉山後、新産業を創出できず、2019 年人口がピーク時の 1/10 以下の 3167 人となり過疎化が加速している。私たちは歌志内市に訪問して、地域の歩みを学びつつ、自治体が超高齢社会をどのように支えているのか、医療・福祉と財政面から学ぶことにした。

研修先・日程

- 8月22日 歌志内市での研修（概要説明、保健師同席）
歌志内市立病院
8月23日 上歌ヴィンヤード
ヤマメ放流場所
道の駅「うたしなないチロルの湯」
歌志内市デイ・サービスセンター
養護老人ホーム楽生園

写真①②歌志内市立病院での研修。③ヤマメ放流場での研修。④歌志内市デイサービスセンターでの研修。⑤⑥介護実践の研修。⑦養護老人ホーム楽生園



●総括

歌志内市は、2006年に空知産炭地域総合発展基金の不適切な長期借り入れ問題が発生し、それによる赤字決算解消のために一括返済を行い、財政危機を迎えた。しかし市は超高齢社会に対応して医療や福祉を切り捨てることはしなかった。財政危機への対応として、リゾート施設「チロルの湯」の他、介護支援施設デイ・サービスセンター、特別養護老人ホーム等の福祉施設を市営から公設民営型に切り替え、自治体病院については公設公営のまま総合病院から療養型病院に転換させ、外来を内科と小児科のみにした。長らく市職員の募集をも停止し財政緊縮を図ってきた。そのことで財政は健全化した。ただし、財政力指数が0.11とかなり低く、地方交付税頼みの財政構造になっている。

こうして歌志内市は、財政危機を迎えながらも深まる高齢化社会に対応すべく、医療施設や介護施設を維持して地域を支えてきた。しかし、病院の外来患者、入院患者、デイサービスの利用者、老人ホームの入所者は全て減少傾向にあるため、やがて財政で支えるのに限界が来る。新産業を創出する、または定住者の増加によって税収を増やして地方交付税依存の状況を改善していく必要がある。

学生研修記

根岸 祐太

地域経済学科 2 年
札幌啓北商業高校出身

菊地 友志

地域経済学科 3 年
富良野高校出身

地域研修を終えて

私たち濱田ゼミでは昨年と同様に歌志内市を訪れました。今回は福祉医療を主なテーマに研修を行いました。財政については市役所で話を伺いました。福祉医療の一番の課題は財源の問題であり、10年ぐらい先までは現状を維持することはできるが、その後の継続について不安があることがわかりました。病院については歌志内市立病院でお話を伺いました。経営は黒字だが、地方交付税に依存しないと難しい状況であることがわかりました。介護については、歌志内市デイサービスセンター、養護老人ホーム楽生園を見学し、お話を伺いました。デイサービスセンターでは、介護度の高い利用者によって収支が左右すること、養護老人ホームでは、措置控えによる入所率低下によって、経営が厳しいこともわかりました。全体を通して、歌志内市の諸課題の対策や取り組みの難しさを知ることができました。

歌志内市の医療と福祉

私たち濱田ゼミ II は少子高齢人口減少下の中で小規模自治体がどのように地域を支えているのかを学びに歌志内市に行きました。訪問は 2 回目、去年は人口対策について話を聞き、今年は医療・福祉、財政面から歌志内市がどのように地域を支えているのか話を聞きました。財政危機のなかでも歌志内市は福祉施設の維持のため福祉施設を公設民営型の組織にしていくということはありませんでした。医療では歌志内市立病院を療養型病院に転換し、対応しました。歌志内市立病院には市民の初期医療の他に、中空知医療圏の慢性期医療を担う医療療養病床としての役割があり、近隣の病院と連携して維持しています。今は福祉施設や医療施設を維持できていますが、利用者が減ってきており経営が厳しくなると予想され、近い将来地方交付税依存の状況を改善していく必要があると考えました。

1部 早尻正宏ゼミ I・II

参加学生 20 名



早尻 正宏

地域経済学科
准教授



町有林内の木材集積場（山土場）で

海と山と風の恵みを受ける寿都町の地域づくり

研修地：寿都町

●研修目的

研修の目的は、寿都町の地域資源である海、山、風を活かした地域再生の取り組みを学ぶことにある。とくに、国内で2ヵ所しかない自治体直営の風力発電事業の収益がまちづくりにどう生かされているのか、に焦点を当てて現地調査を実施した。

研修先・日程

- 9月17日 寿都町役場で聞き取り、寿都町長（片岡春雄氏）：地域資源を生かした町づくり、寿都町産業振興課農政係長（土開直樹氏）：再生可能エネルギーを通じた地域産業の活性化
風力発電設備視察
- 9月18日 木造公共建築物視察（総合体育館、こどもふれあいセンター）
町有林と国有林の連携現場（丸太集積場）の視察
寿都漁業協同組合のセリ視察
寿都水産加工業協同組合の堆肥製造工場視察
- 9月19日 寿都町農政係長・土開直樹氏との意見交換会（寿都町農村活性化センター）
寿都アンテナショップ神楽（ニセコ町）の視察

写真①片岡春雄・寿都町長による町づくりに関するレクチャー（町長との質疑応答）。②町営風力発電所の視察。③木造づくりの寿都町総合体育館の視察。④寿都町農政係長・土開直樹氏による森づくりに関するレクチャー。⑤寿都漁港のセリ場の視察。⑥磯焼け対策に用いる堆肥の製造工場の視察



●総括

今年度のゼミでは「地元資源を活かした地域再生の在り方とは何か」をテーマに、専門書の輪読、研修先の寿都町の情報収集を行ってきた。研修先として寿都町を選んだのは、全国でも珍しい自治体直営の風力発電事業がまちづくりにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにしたかったからである。

寿都町長および町職員によるレクチャーでは、ゼミ生が積極的に質問するなど事前学習の成果を存分に発揮していた。また、「海」では漁港やセリの見学、「山」では町有林と国有林の踏査、「風」では風力発電施設への立ち入りなど、充実した現場視察を行うことができた。最終日の町職員との意見交換会も盛況だった。

ゼミ生は、3日間という短い研修期間の中でも、全国的にも貴重な地域づくりの現場を肌で感じることができたようである。風力発電事業が町の医療・福祉を支え、産業振興と町民還元に結び付いている事実を実地で学ぶことができた。加えて、地域再生に奮闘する町職員の姿を目の当たりにし、将来の進路を考える上で刺激を受けたゼミ生も少なくない。

最後に、産業振興課農政係の土開直樹係長には、研修の企画から当日の視察に至るまで全面的にご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

学生研修記

竹花 友希

地域経済学科 2 年
北広島高校出身



風と海のまち

地方自治体が経営する風力発電施設は全国でも寿都町以外には1ヵ所しかない。収益事業である風力発電に税金を投ずる場合、納税者である住民の方々に説明し、理解を得て成果に結び付ける必要がある。寿都町の基幹産業は漁業だが、磯焼けなどにより漁獲量が年々減少している。そこで同町では風力発電で得た利益を漁業に活用し、磯焼け対策を行っている。風が強いことは、かつてはデメリットであったと思われるが、それを逆手にとって産業振興に役立てていた。税金を投入した事業の将来性や収益の使途について住民の理解を得て、事業実施に向け努力をしたことが重要だったと思う。他の地域においてもデメリットだと思っていることを捉え直すまちづくりが展開することを期待したい。

辰見 泉樹

地域経済学科 3 年
滝川西高校出身



風を活かしたまちづくり

年間を通して強い風の吹く日が多く、全国の自治体では初の試みとなる町営風力発電事業を行う寿都町を訪れた。同町では、売電収益を産業振興、環境保全、医療・福祉の充実などまちづくりに活用している。産業振興では、基盤産業の漁業において深刻な問題となっている磯焼けの対策として、木質資源を利用した肥料を海中に投入し藻場の再生に取り組んでいた。環境保全では植樹活動の支援などに力を入れていた。そして、医療・福祉では診療所の運営経費として売電収益を充てていた。他方で、再生可能エネルギーを固定価格で買い取るFIT法の期限が迫る中で、まちづくりの貴重な財源である売電収益が減少する見込みである。FIT法の期限が切れた電力をどう活用していくかがこれからの課題だ。

1部 平野研ゼミ I・II

参加学生 25 名



平野 研
地域経済学科
教授



地域研修報告会終了後に

札幌市のフェアトレードタウン認定についての調査

研修地：札幌市

●研修目的

札幌市のフェアトレードタウン認定を契機に、フェアトレードの仕組みやフェアトレードタウン認定方法について学び、次に認定基準を確認するような形で、市内のフェアトレード運動について聞き取り調査を行い、身近にある市民運動の取り組みから世界経済の問題を考える。

研修先・日程

7月	インタビュー対象者へのアポイントメント 事前学習
夏季休業 期間中	各班によるインタビュー調査 フェアトレード団体、フェアトレードショップ調査
10月	フェアトレード大学認定についての調査 事後学習

●総括

本年度の地域研修では、学年横断でインタビュー調査班を分け、学生自身で調査先にアポイントを取り、インタビューを実施した。3年生は昨年度の浜松市での調査経験を踏まえ、質問項目、依頼文の作成などに中心的役割を果たした。一方で2年生は、調査後のインタビュー内容などの整理を行った。両学年で調査を行うことによって、浜松市と札幌市のフェアトレード運動の共通点と相違点に気づき、より立体的にフェアトレードタウンについて理解を深めることができた。

また当初、調査予定にはなかったが、本年10月に北星学園大学・札幌学院大学が二校同時にフェアトレード大学に認定されたため、急遽調査することになった。両校を訪問し、サークル活動、販売や授業の様子など、近隣大学の取り組みを見学しインタビューを行ったことは、本学での今後の取り組みの可能性として、大きな刺激ともなった。

ただ残念なことに、札幌市役所や市議会など行政に対する聞き取り調査を実現することができなかった。自治体との連携はフェアトレードタウン認定においても非常に重要であり、それを踏み出した結果が、タウン認定の決め手となった訳であるから、今後の課題として取り組む必要がある。

学生研修記



①



②



③



④



⑤



⑥

写真①フェアトレードタウン認定式。②フェアトレードフェスタ2019。
③フェアトレード紅茶。④フェアトレード大学認定式。⑤⑥札幌学院大学調査。⑦札幌フェアトレードポップ。⑧Y'sカフェ。⑨これからや



⑦



後藤 謙太
地域経済学科 2 年
札幌光星高校出身



船戸 将太
地域経済学科 2 年
江別高校出身

札幌市のフェアトレードタウン認定

今回私たちは、国内で5番目にフェアトレードタウンとして認定された札幌市のフェアトレードタウン運動を調査しました。研修先としてフェアトレードの商品を扱っている店舗やイベントを開催している団体にお話を伺いました。そこでは、フェアトレードタウンに認定された経緯や具体的な活動などをお話して頂きました。その中でまだまだ市民の認知度が低いことが課題であり、市民への啓発運動が十分ではないということを感じました。今回の研修で、活動をしている方々に直接お話を伺うことができ、フェアトレード活動の魅力を聞かせていただき、良い経験になりました。今後もフェアトレードに関する知識や発展途上国の知識を深めていきたいと思います。

札幌に見るフェアトレード

今回私達は2019年に新しくフェアトレードタウンに認定された札幌市のフェアトレード活動の実態を知ることが目的として、札幌市の各店舗、団体、フェアトレード大学に取材をしました。各店舗では団体と協力してイベントでフェアトレード商品を販売したり、販売だけでなくフェアトレードを知ってもらうための活動を行っていることがわかりました。団体ではフェアトレードに関する様々なイベントを企画し、フェアトレードをより多くの人に知ってもらうためのイベント行っていました。フェアトレード大学では学生が中心となって学内外での様々なイベントに積極的に参加していることがわかりました。しかし、今回の調査でフェアトレードタウンに認定されたことでの大きな変化はなかったことがわかりました。今後の課題として、より多くの人にフェアトレードを知ってもらい身近に感じて貰うことが必要であると感じました。



⑧



⑨

1部 古林英一ゼミⅠ

参加学生数 12 名



古林 英一
地域経済学科
教授



釧路川川下りにて

釧路湿原の保全事業と観光資源としての利用

研修地：釧路市・釧路町・標茶・鶴居村

●研修目的

湿原の保護・再生はわが国の自然保護政策の重要な事業のひとつである。農地開発やそれに伴う河川改修などにより湿原域は大きく減少した。今日行われている湿原再生事業の現状を直接見聞するとともに、湿原の今日の利用の現状を知ることが目的とした。

研修先・日程

- 9月1日 釧路市の宿泊先に移動
9月2日 細岡展望台（釧路町）で国交省釧路開発建設部の担当者から復元事業についてのレクチャー
標茶町茅沼地区で旧川復旧事業による自然再生事業の現状を見学
鶴居村温根内ビジターセンターにおいて環境省の自然保護官によるレクチャーの後、湿原内を見学
9月3日 釧路川の川下りを体験後、札幌に帰着

写真①細岡展望台からの釧路湿原の光景。②③茅沼地区の旧川復元事業実施地。④温根内付近の湿原内の草原。⑤⑥川下りの船からみた釧路川。⑦川下りで集合写真



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

●総括

名前や存在を知ってはいても、これまで実際に釧路湿原を訪れたゼミ学生はいないことから、まずは釧路湿原とはどのようなものなのかを実際に見聞し、さらに国や自治体がおこなっている湿原の再生事業を直接見学しレクチャーを受け、同時に実際に旧川が復元されたエリアで湿原の植生が徐々に復活しつつあることを見ることができ、再生事業の効果を知ることができた。

また、川下りによって湿原の自然を直接体験するとともに、現在実施されているワイズユースの一部を理解することにつながったと思われる。



細岡展望台からの釧路湿原の光景（奥は釧路市街地）

学生研修記

太田 愛梨
地域経済学科 2 年
札幌平岸高校出身



関根 洸太
地域経済学科 2 年
苫小牧南高校出身



湿原再生事業の実態

今回私たちが地域研修で訪れたのは釧路湿原です。湿原の保護と再生を目的とした湿原再生事業の実態を学んできました。

私たちは茅沼地区と幌呂地区で行われている湿原再生事業の現場に訪れました。茅沼地区では直線に埋め立てられた川を蛇行に戻す取り組みが、幌呂地区では地盤を切り下げずる取り組みが行われていました。それらの取り組みによって乾燥化により繁殖したハンノキやオオアワダチソウは減少傾向にあるものの、昔の姿に戻るには途方もない時間がかかるという話をお聞きました。実際に釧路川周辺では枯れかけているハンノキはあるものの、川から少し離れた場所には元気なハンノキが生えている状態でした。

今回の地域研修を通して人間の活動がいかに生態系に影響を与えているか、また生態系を元に戻すのにとてつもない労力と時間を要するという実態を学びました。釧路湿原の生態を間近で観察し、再生事業のリアルな取り組みに触れることができたので非常に有意義な研修でした。

地域研修を終えて

今回私たちは釧路市へ釧路湿原の再生事業を学びに行きました。事前に過去開発されて乾燥化してしまった釧路湿原がどのような経緯で開発されたのか、その開発の是非と今どのような活動が釧路湿原で行われているのかを学習していました。実際、釧路湿原を目の当たりにすると一面の雄大な自然が見渡すことができ、本当に乾燥化しているのかと考えてしまうほどでした。しかし北海道開発局の職員の方に話を伺うと乾燥化の象徴である植物や外来植物が多くあることや開発によって生物の種数、個体数ともに一度は減少してしまったことが分かり、その植生を開発する前に戻すための再生事業をどのように行っているか、詳しく説明していただくことができました。

今回の地域研修では釧路湿原を再生するためにどれだけの時間がかかっていて、その事業に携わる人の熱意を感じました。そして多くの貴重な植物や動物、そして復元された自然の素晴らしさを目の当たりにし沢山の魅力が釧路湿原にあることが分かり、貴重な体験となりました。

1部 古林英一ゼミⅡ

参加学生数9名



古林 英一
地域経済学科
教授



鯖江駅前

本州における野生鳥獣害対策の現状を知る

研修地：福井県鯖江市

●研修目的

昨年の地域研修Ⅰではえりも町におけるアザラシの漁業被害と地元住民や行政の対応について学んだが、今年は鯖江市においてイノシシを中心とする獣害被害地域における地元住民や行政の対応について学ぶことを目的とした

研修先・日程

- 9月5日 鯖江駅に集合し、イノシシ捕獲罠や農業被害の現地視察
宿泊先の公民館でミーティング
- 9月6日 獣害防護施設の見学および施設の点検・修復作業に同行し、作業を手伝う
地元住民との懇談会
- 9月7日 「うるしの里」において鯖江市の伝統工芸品である漆器についての学習
- 9月8日 獣害防護施設の点検作業とサル追い払い作業に同行し作業に参加
地元住民との懇談会

写真①イノシシ捕獲罠。②イノシシ被害にあったソバ畑。③イノシシ防除用に飼育されている和牛。④防護柵の修復作業



●総括

鯖江市を始めとする北陸地方では21世紀になってから、イノシシなどによる農業被害が急激に広がった。二つの地区で地元住民との懇談会をおこない、鳥獣害に対する地元住民の意識や対応を聞き、さらに実際に地元住民がおこなう作業に同行し、実際に防護施設の修復作業に従事した。その結果、長年にわたりアザラシと共存してきたえりも町の住民とは異なり、近年になって突然被害を被るようになった鯖江市の住民では対象鳥獣に対する意識が全く異なることを知ることができた。

また、北海道とは異なり、市街地の至近地域で、過疎化・高齢化が進んでおり、実際に作業に従事することで、防護柵の維持管理の負担が大きいのしかかっていることを身を以て知ることができた。

学生研修記



鯖江市におけるイノシシ被害の実態

小関 隆太

地域経済学科3年
札幌大谷高校出身

今回私たちは地域研修で福井県鯖江市に行きました。鯖江市ではイノシシによる畑作被害が近年増加しており農村の人々は苦しめられてきました。実際に研修やヒアリングをしてみると被害はイノシシだけでなくサルやシカなどの被害も受けていることを学びました。被害対策として電気柵を設置したり牛を放牧しましたが被害がすべて抑えることができるというわけではなく、更に住民の高齢化に伴い管理する人不足もあって非常に管理が困難な状態になっていることを学習しました。研修中は地元の方と一緒に電気柵の点検をしましたが、点検の範囲が非常に広く地元の方だけではかなり大変だと肌で感じることができました。昨年のえりも町のアザラシ被害ではえりも町民は昔からアザラシに生かされてきたこともあり「共存」の意志はあったのですが鯖江市では被害が出てきたのは最近のことであり、特に昔から思い入れがあるというわけではなく「共存」という意志はありませんでした。少子高齢化が進むにつれて村では新たな対策を試行錯誤していますがそれと同時に行政との連携問題もあることを学びました。電気柵を設置する為の費用や管理など経済的な面も学ぶことができてよかったです。被害が起きている場所は鯖江市から車で15分ほどの場所で起きているのが実態です。北海道では中心部から同じ様な距離では鳥獣害は起きません。被害が起きる場所は1時間や2時間運転する場所です。改めて北海道の土地の広さを実感し、それと同時にもし北海道にシカだけでなく様々な動物による被害が人口の少ない場所で起きることがあれば鯖江市以上に電気柵の設置や管理が大変であると思いました。



野生鳥獣害の現場

私たち古林ゼミⅡは9月6日～9日に福井県鯖江市で地域研修を行いました。昨年は北海道のえりも町で海洋生物であるあざらしの鳥獣害被害について勉強してきましたが、今回は陸上の生物である猪の鳥獣害被害について勉強してきました。

西田 瑛

地域経済学科3年
岩内高校出身

1日目は、お昼に鯖江駅に集合した後今回の地域研修に同行してくれた市の職員の方々に挨拶と自己紹介をしました。その後早速猪を捕らえるために実際に使われている罠を見学させてもらいました。私たちが見に行ったときは猪が罠にかかった形跡がありましたが、罠に不具合が生じていたために捕獲することは出来ていませんでした。次に実際に猪の被害を受けた畑を見学させてもらい、宿に向かいました。その日の夜は市の職員の方が用意し調理して下さった猪肉を食べることができました。想像していたよりも臭みがなく美味しかったです。2日目はその地域の組合の山里の会の方々に同行し電気柵の点検を行いました。炎天下の中作業服を着ての肉体労働はとても大変で、毎日この作業やっている方々の大変さが身に染みてわかりました。午前中の作業が終わった後、宿泊している公民館にて昼食を取った後ヒアリングをしました。約3時間にも及ぶヒアリングはとても貴重な時間になりました。3日目は私たち個人で自由学習で鯖江市のことや私たちが宿泊していた地域の事などのことを勉強しました。最終日は同じ鯖江市にある違う地域である西大井町にて地域研修を行いました。そこでは地元の人たちと一緒に電気柵の点検、ネットの補修を行いました。その後昼食をとりヒアリングをしました。2つの地域を比較してみると様々なところに相違点がありそれぞれの地域によって考え方や工夫、対策などが少しずつ違って面白かったです。また、西大井町では猪よりも猿から受ける被害の方が大きいと言う話を聞き、急遽野生のサルを見学させていただけるようになりとても貴重な体験ができました。このようにして4日間の地域研修を行ってきましたが、今回の地域研修で猪の鳥獣害被害や対策について実際にフィールドワークやヒアリングをして知る事が出来てとても貴重な体験となりました。

1部 水野邦彦ゼミ I・II

参加学生数 19 名



水野 邦彦

地域経済学科
教授



「笹の墓標展示館」前で

朝鮮人労働の現場を見学し、実態を学ぶ

研修地：幌加内町朱鞠内

●研修目的

かつて朝鮮半島の人々が労働者として北海道に連れてこられ、日本人労働者とともに炭鉱やダム建設などの現場に投入された。苛酷な生活のなかで多くの犠牲者を生んだ労働現場の痕跡がわずかに残る幌加内町朱鞠内を訪れ、朝鮮人労働の実態を知る手がかりを得る。

研修先・日程

9月17日 朱鞠内湖
雨竜第一ダム
共同墓地
笹の墓標展示館
9月18日 「まどか」そば打ち体験

●総括

1935年以降、幌加内町朱鞠内での鉄道建設工事・ダム建設工事において「タコ部屋」労働がおこなわれ、多数の朝鮮人も投入された。労働者たちは24時間監視体制のもとで労働・食生活・居住の全環境において劣悪な待遇を受け、多くの犠牲者を出した。この遺体は光顕寺に運びこまれ、朝鮮人死亡者の遺体はたいてい粗雑に林のなかに埋められ、墓標も立てられず、ただ笹の葉が墓標の代わりになっていた。のちに林で発掘された遺骨が何体か合わせて埋葬された朝鮮式の墓を研修一行は訪れた。

光顕寺はその後「笹の墓標展示館」となり、当時の資料が展示されていたが、2019年2月の大雪で建物が倒壊の危機に瀕しており、残念ながら研修では中の展示物に学ぶことはできなかった。ダム工事現場の見学のさいには、北電の担当者にダム内部を案内いただいた。ダム内部のはるかにつづく階段、下方の気温の低さに、一行は若干の衝撃を受けたようである。

ゼミ学生たちのなかでは次のような総括がみられた。

◇国は諸々の問題が解決済みとしているが、当事者にとっては何も解決していないと考えられる。

◇こういった問題を過去のものにしてしまわないために、地域単位での学びや活動が必要である。

学生研修記

山内 郁歩

地域経済学科 2年
小樽双葉高校出身



楠 陸哉

地域経済学科 3年
室蘭清水丘高校出身



悲惨な過去を繰り返さないために語り継ぐ

わたしたちが住む北海道でかつてタコ労働者と呼ばれる人たちが、強制連行された朝鮮人労働者たちが過酷な労働を強いられ、数多くの人々が命をうしなった。朱鞠内湖の雨竜ダム建設工事も、その過酷な労働現場のひとつであった。北海道ならではの厳しい寒さや劣悪な環境のなかでの非人間的な生活と労働による犠牲者が多数いたこと、身元がわからないまま遺骨が共同墓地に埋められたことを、わたし自身もゼミで学ぶまで知らなかったし、同じように知らない北海道人は多いと思われる。犠牲者の碑は置かれているが、共同墓地のあたりに今なお眠っているはずの遺骨があることを、わたしたちは忘れてはいけなと、身をもって学んだ。悲惨な過去を二度と繰り返さず、このような犠牲者が二度と生まれないよう、わたしたちは語り継ぐ必要がある。

身元不明の朝鮮人犠牲者が眠る共同墓地

朱鞠内の林に、過酷な労働のなかで命を落とした人々の墓が30ほどあった。これらには墓石があり、そこに眠っているのは日本人犠牲者である。その墓石群の奥のほうに、土がドーム状に盛られた韓国式の墓があり、そこには林のなかの笹の下で見つかった朝鮮人犠牲者の遺骨が何体も集めて埋められている。遺骨なので機械を使うわけにはゆかず、人の手で発掘されたものであるが、このほかにもいまだに埋まったままの遺骨があるかもしれない。墓の前の慰霊碑には朝鮮人の名前と年齢が数多く刻まれているが、埋められているのがだれの遺骨なのか、不明のままだそう。20歳～40歳の人が多いが、なかには10代後半の人もみられた。いまの自分よりも低い年齢で故郷を離れ、遠方の極寒の地で過酷な労働を強いられるとは、想像できないほど辛いものだったろう。せめて名前が判明すればと思う。

写真①雨竜第一ダム監査廊の内部。②犠牲者が眠る朝鮮式の墓。③朱鞠内湖。④朱鞠内湖展望台。⑤浅茅野飛行場建設工事犠牲者追悼碑。⑥そば打ちの過程。⑦宿舎「まどか」にて



1部 水野谷武志ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 21 名



水野谷 武志

地域経済学科
教授



緊急避難用高台人工地盤「望海橋」をバックに

離島における観光と地域活性化—奥尻島を事例に

研修地：奥尻町

●研修目的

地理的条件が厳しい離島では地域活性化の実現が難しい課題となっているが、特に観光の視点から地域活性化の現状と課題を具体的な地域で考察することが本研修の課題である。そこで、観光資源にめぐまれ、地域活性化にも積極的に取り組んでいる奥尻島を事例とした。

研修先・日程

- 8月18日 11:00 大学出発→18:45 奥尻港着
8月19日 奥尻島観光協会との意見交換会（奥尻商工会2階会議室）、奥尻町地域政策課商工観光係との意見交換会（海洋研修センター）、賽の河原公園を散策、歴史民俗資料展示室（稲穂ふれあいセンター）を見学、宮津弁天と球島展望台を散策、「チーム島おこし」メンバーとの交流会（奥尻町民センター）
8月20日 徳洋記念碑を見学、奥尻島津波館を見学、北追岬公園を散策、奥尻ワイナリーを見学、奥尻町教育委員会との意見交換会（海洋研修センター）、神威協温泉保養所で温泉に入る、ゲストハウス imacoco を訪問＋意見交換
8月21日 緊急避難用高台人工地盤「望海橋」（青苗港）を見学、奥尻漁業組合青年部「海館」を見学＋意見交換会
14:00 奥尻港発→21:00 大学着

写真①奥尻島観光協会との意見交換会。②歴史民俗資料展示室。③「チーム島おこし」メンバーとの交流会。④奥尻島津波館。⑤奥尻ワイナリー。⑥奥尻島マスコットキャラクター「うにまる」



●総括

観光客が減少傾向にある中で、島で唯一の大型ホテル「緑館」が2018年度で閉館し、それに伴って瀬棚・奥尻間の夏季就航フェリーも2019年度に休止となり、奥尻町は難しい局面を迎えていた。そんな中でも様々な主体が地道な活動を続けていることがわかった。公的部門としては地域振興課や観光協会がレンタカーや観光メニューを充実化させようとしており、また島留学として全国からも注目され、多くの島外高校生を引きつけている奥尻高校でも、高校生による島の観光プランが考案されている。民間部門としては、体験・滞在型観光で全国から観光客・リピーターを獲得している「ゲストハウス imacoco」、島において本格イタリアンを提供している「レストラン・ペラヴィスタ」、ぶどう栽培からワインの製造販売まで手がける「奥尻ワイナリー」、島の漁師によって島で採れた魚介類を最新の冷凍技術で販売している「海館」、さらに、島の有志が集まって島の活性化のために様々なイベントを企画・実行している「奥尻島チーム島おこし」は魅力的であった。

このような活動を担っている多くが島の若手・中堅層であり、本研修においてその人々との熱い思いと行動力に触れ、これが奥尻島における観光発展、ひいては地域活性化につながる可能性を大いに感じた。

学生研修記

守山 奈央加
地域経済学科 2年
札幌白石高校出身



観光と地域活性化

私たちは観光と地域活性化というテーマのもとに奥尻島を研修地とし、その際に、ゲストハウスの「imacoco」や、奥尻ワインの製造所「奥尻ワイナリー」を訪問しました。imacocoでは、オーナーにインタビューしました。オーナーは「出会い」を大切にしていると仰っており、ゲストハウスを通じ、一人でも多くの観光客に島の魅力を伝え、再度島を訪れるリピーターを増やすことで、奥尻島の観光事業に大きく貢献していってほしいとのことでした。また、奥尻ワイナリーでは、これまでにワインの販売実績を積み重ねており、いずれは世界に向けて発信できるようなワインを生産することを目指していることを知りました。このように、観光協会などの公的機関ではない民間企業でも、島を活性化するための活動が見られ、また、出会いが資源ということをもっと感じた研修でした。

難波 瞭太
地域経済学科 3年
旭川大学付属高校出身



離島での観光による地域活性化

今回、水野谷ゼミでは離島での観光による地域活性化をテーマにし、奥尻町を調査地としました。奥尻町では地域振興課・奥尻観光協会・教育委員会の職員の方との意見交換会という場を設けていただきました。それぞれ前もって準備していた質問書とともに奥尻町の観光についての内容を説明していただきました。奥尻町で一番大きい緑館というホテルが閉鎖したことにより、船の便が減少。これにより観光客が減少していることや島外の生徒を呼ぶ、地域みらい留学についてなど資料をもとに詳しく説明していただきました。やはり少子高齢化が進んでいる中、人口減少・観光客減少により地域の活気が失われかけているのが伝わってきました。ですが、なにより地域職員の方はもちろん、住民の方々・旅館の方々がとても親切で人とのつながりを大事にしている地域でした。伝わり切れていない魅力が離島には山ほどあり、また機会があれば観光しに行きたいと思います。

1部 宮入隆ゼミ I・II

参加学生数 21 名



宮入 隆
地域経済学科
教授



JA ぶらの集出荷施設にて

複合農業地域からみた北海道農業の将来像

研修地：富良野市

●研修目的

青果物を主体として独自の産地発展を遂げた富良野市を事例に、自治体・農協・農業者・流通業者などへの聞き取り調査を行い、複合化した地域農業の現状と課題を明らかにする。そこから北海道における地域農業の維持・発展の方向を検討することを目的とした。

研修先・日程

- 8月21日 富良野市役所
ぶらのワイン工場
- 8月22日 JA ぶらの
㈲天間農産本舗
- 8月23日 富良野地方卸売市場(株)に
富良野チーズ工房

写真①富良野市役所での聞き取り風景。②昼食の風景。③ぶらのワイン工場にて。④JA ぶらの玉ねぎの選果施設見学。⑤JA ぶらのミニトマト集出荷施設にて。⑥富良野市地方市場での施設見学。⑦富良野チーズ工房でのバター加工体験



●総括

1970年代の稲作の生産調整以降、野菜を中心に転作を進めることで地域農業の発展方向を大きく転換した富良野は、それ以降、玉ねぎを基幹に、多品目生産による道内有数の野菜産地として存立してきた。その一方で、自治体の支援もあり、傾斜地を活かした醸造用ブドウ生産や中山間地での酪農の振興など、地形的な条件も活かした総合産地化が進展した。さらに原料供給だけではなく、ワインやチーズの製造も行われ、地域の特産品となっている。

労働集約型作物を主体とした産地にとって、最大の問題は労働力不足であり、経営の高度化を阻害する要因にもなっている。富良野農業は周辺地域からの労働力調達に関しては道内先進地であり、農協と自治体が連携してそれを実現してきた。しかし、人口減少と相まって、さらに厳しい環境のなかで、今日では外国人技能実習生の受け入れも常態化している。全国一のスイカ作付面積を誇る大規模経営では、若い従業員を多数確保するため、法人化に加え、GAPを取得して雇用環境の改善に努めてきた。それでも不足する労働力を中国人実習生で補っている状況にあった。

総合産地化と特産品開発、双方において先進地である富良野農業は、まさに道内農業のこれからを映し出す鏡となっている。

学生研修記

東 攻志
地域経済学科 2 年
千歳高校出身



総合産地からみた北海道農業の課題

富良野市役所やJAぶらのでは、基幹である野菜生産が収穫時の人手不足により、拡大することができず、小麦の作付面積が増えている実態が明らかになりました。野菜生産を維持していくために、JAはアグリプランの設立など労働力対策に積極的に取り組んでいます。また、市役所でも農協と連携して雇用労働力の確保を支援しています。

さらに富良野市では、ワインやチーズなどといった特産品を自治体主導で開発するといった手法がとられ、果樹や畜産を含めた総合産地となっていることが分かりました。初めてみる加工施設の現場で、高付加価値化の難しさに触れることもできました。

富良野市では地域活性化のために、多様な組織や関係機関が連携して対応しており、これは北海道農業全体にとっても重要な課題です。この研修成果をもとに、北海道農業の可能性について、さらに考えを深めていきたいです。

遊佐 みつき
地域経済学科 2 年
札幌北陵高校出身



地域農業の多様性を活かした発展方向を考える

私たち宮入ゼミは、野菜生産中心の複合産地である富良野市で、北海道農業のあるべき将来像を探るため地域研修を行いました。今回の地域研修では、5つもの研修先で直接お話を伺うことができ、それぞれの役割や、地域の課題に対する具体的な取り組みを詳しく聞くことができました。

富良野農業の特徴としては、立地条件を活かした多様な生産方式や販売戦略を行っていることが挙げられます。また、各主体による更なる労働力確保対策が必要になっていることも分かりました。このような実態から北海道農業の将来像を見たとき、多様な関係機関による連携を強めることで、地域農業をより強いものにすることが可能であると考えました。

現場で地域農業の現実に触れたことで、分かったことが多々あり、とても貴重な体験をさせていただきました。それを今後のゼミ活動に活かしていきたいと思います。

2部 宮入隆ゼミ I・II

参加学生数 11 名



宮入 隆
地域経済学科
教授



カルビーポテト豊頃支所にて

大規模畑作経営の現状と今後の課題

研修地：豊頃町

●研修目的

豊頃町を事例に、大規模畑作地帯における農業の変化、とりわけ輪作体系の現状と課題に着目しながら、大規模畑作経営の今後の展開方向を明らかにすることを目的とした。合わせて、畑作地帯において求められる農協の役割についても考察した。

研修先・日程

8月26日 JA 豊頃町
8月27日 美馬農場
カルビーポテト豊頃支所

写真①②③JA 豊頃町での聞き取り調査。④美馬農場での調査。⑤トラクタで自動操舵技術を学ぶ学生。
⑥できたてのポテチ試食（カルビーポテト豊頃支所）。
⑦カルビーポテト豊頃支所の集荷施設にて



●総括

十勝管内の大規模畑作経営は著しい規模拡大を遂げたが、豊頃町も例外ではない。北海道平均が約24haであるのに対し、豊頃町では平均経営規模が57.9haとなっている。このような規模拡大に合わせて、地域農業自体も大きく変化している。その1つが、一時期は道内有数の産地となった大根ほか、野菜類の急激な生産縮小であり、その結果としての豆類・小麦を中心とした土地利用型作物への再帰である。しかし、輪作体系の基本である畑作4品（小麦、豆類、馬鈴薯、てん菜）においても、手間のかかる馬鈴薯やてん菜が敬遠されるなど、従来通りの輪作体系は維持が困難になっている現状がある。

そこで求められる新たな技術的課題については、地域マネジメント主体としての農協に対する期待も大きい。今回の研修では、農協で馬鈴薯のシストセンチュウ対策のための品種更新を中心に現場の直面する課題を見せて頂いた。個別経営調査においては、町内の平均よりもさらに大規模な美馬農園にうかがい、労働力調達が困難な中で新たな輪作体系の確立に対する要望の強さを感じた。また、カルビーポテト豊頃支所においては、集荷を円滑に行うために、農家の作業も請け負う地元立脚型の企業の重要性も実感することとなった。

学生研修記

稲田 翔
地域経済学科 2年
札幌静修高校出身



大規模畑作農業のこれから

私たちは大規模畑作経営の現状と課題をテーマに、豊頃町で地域研修を行いました。農家さんなどへの聞き取り調査から見えてきたことは、規模拡大に伴って、労働力不足が大きな課題になっていることです。家族労働力を中心に行ってきた農業が、規模拡大によって変化していることを実感しました。

輪作体系においては手間のかからない作物への変更が進んでいます。近年は、機械で播種から収穫まで行える小麦や大豆のほか、飼料作物などの収益性の低い作物の作付けも拡大しています。作付体系にみられるこのような「粗放化」は、食料の安定供給に対する不安定要因ともなります。そういった課題を解決するためには、大規模農業の先進地である十勝でも、省力化を前提とした新技術のさらなる導入が求められています。JAを中心として、地域全体での新たな技術体系の確立が重要だと思いました。

小野 竜雅
地域経済学科 2年
遠軽高校出身



規模拡大が進んだなかでの新たな課題

豊頃町は近年まで大根を中心とした野菜生産の導入により、畑作・野菜複合経営が増加しました。しかし、労働力不足や規模拡大により、畑作4品を中心とした土地利用型作物へと戻りつつあります。十勝管内では小麦の過作傾向が目立つ中で、豊頃町では豆類が最も多く作付けられており、それが輪作体系の特徴となっています。さらに、カルビーポテト豊頃支所が地元にあることで、加工用馬鈴薯の生産割合が高いことも分かりました。

このような調査結果から見えてきたことは、大規模化に伴い機械や新技術導入による省力化、労働力不足を解消するための農作業支援、地域農業の再編に合わせた生産技術の体系化など、大規模化と効率化が進む十勝農業であっても、多くの課題を抱えていることです。そして、規模を拡大しても、個別完結型ではなく、農協を中心に地域全体での取り組みが重要だと感じました。

1部 山田誠治ゼミ I

参加学生数 14 名



山田 誠治
地域経済学科
教授



札幌デジタルイノベーションにて

IT を活用した地域活性化

研修地：札幌市

●研修目的

1 部山田ゼミ I では、IT を使った地域の活性化を学修の課題としており、地域研修として、北海道を舞台にクリエイティブな発想や技術により、地域の未来を創ろうとする人たちのための交流の場である NoMaps のカンファレンスに参加し、様々なテーマについて、分担して参加した。

研修先・日程

10月16～18日の3日間、以下のテーマのNoMaps開催のカンファレンスに分担して参加。

- 10月16日 AIで実現する 温かい地域社会
北海道から考える「田舎の未来」
- 10月17日 イラスト地図とGPSがリンクする
StrolyをRSRで使ってみた!!
食の宝庫”を生かすマーケティング
The Time Machine ～1964年の渋谷
ヘタイムトリップ～ 世界が認めたVRコ
ンテンツは、こうして生み出された
- 10月18日 空間×テクノロジーが生み出す、新しい
景色
固定概念にとらわれるな! 北海道の未
来デザイン
NHKスポーツ vs. eスポーツを考える

写真①狸小路では短編映画祭が。②「北海道の未来」会場にて。③これからStrolyを学ぶ。④学生の参加もWelcome。⑤ストリートステージで介護の未来を考える。⑥NoMapsガイドブック



●総括

学生は関心のあるテーマのカンファレンスに参加し、いろいろ考えさせられてきたようである。IT関係のカンファレンスでは、まず、AIを活用して地域社会を温めるというテーマでは、運輸企業での活用例が紹介され、利用の結果生み出される効率性が、他の地域の人たちへの取り組みに生かすことができる、と熱く紹介された。また、イベントや観光に生かせるデジタルMapの技術のテーマでは、低廉なコストで、参加者にポイントの魅力を紹介し、ネット情報と連動させPRのツールとしてのより広い可能性が紹介されていた。さらに、空間にテクノロジーを加えるというテーマでは、新しい場づくりが新たなコミュニケーションのツールとして活用でき、イベントや地域活性化のためだけではなく、教育の場でも感性の育成や個々に合わせた学びに活用される未来があると考えたようだ。北海道の「田舎の未来」や食のマーケティング、スポーツの未来などのテーマでも、現場で活躍する人の熱意と最新テクノロジーの活用によって、次々生み出される多彩なアイデアに直接触れ、クリエイティブな発想や技術によって、さまざまな分野で地域を盛り上げていく取組に強く関心をもてたのではないかな。

学生研修記

高木 愛奈

地域経済学科 2年
岩見沢緑陵高校出身



沼澤 慧都

地域経済学科 2年
千歳高校出身



空間を映えさせるテクノロジーはどう使えるか

私たちのグループは、NoMapsのテーマ「空間×テクノロジー」というカンファレンスに参加しました。その内容は、様々なデジタルテクノロジーを活用し、リアルとバーチャルを融合させた映像効果を活用し、街や店舗、その他広域的な空間を創り出し、多彩に想像をめぐらせられるというものだった。

実際、プロジェクションマッピングがある店舗にも見学に行きましたが、窓のない空間に折々の風景が見える窓を創り出したり、4K・8Kの映像で、外出できない人たちがいる介護施設の空間を楽しんだり、対面で会議するより大きいスクリーンで遠隔の会議の例も紹介されました。

空間にテクノロジーを加えることで、観光や地域活性化に活用してイベントや地域活性化だけではなく、教育の場でも感性の育成や個々に合わせた学びに活用される未来があると考えました。

考えさせられたAIとの付き合い方

私は、「AIを使って地域を温かくする」というテーマのカンファレンスに参加してきました。

紹介されていたのは、Aタクシー会社の社長さんの話で、運行計画の作成にAIを活用することによって効率的な配車が可能になり、その新しい条件を生かし、AIのできることはAIに任せ、手の空いた人員は仕事の質の向上、地域への貢献につとめる事ができるようになった、という話であった。

AIの技術が実際に利用され、仕事が代替されても、では、そのAIを利用するその上で人間がどうするのか、が問われていると思った。AIが普及しつつある社会で、仕事はなくなる、ということより、自分たちがどう仕事をつくっていき、AIと仕事にどう向き合っていくのか、が重要で、自分の仕事の下にAIが存在している中でどう仕事をするか、が問いかけていていると思った。

1部 山田誠治ゼミⅡ

参加学生 11 名



山田 誠治
地域経済学科
教授



那覇空港に到着

南城市・北谷町の観光政策の課題と対策について 研修地：沖縄県南城市・北谷町

●研修目的

1 部山田ゼミⅡでは、観光による地域の活性化を学修の課題としており、北海道と同様に観光が主要産業である沖縄の観光地、特に新しい観光の展開を追求している南城市と北谷町を訪問し、県からも観光政策の課題の解説を聞き、実態について様々な体験をする予定であった。

研修先・日程

- 9月4日 移動
国際通りの体験型観光・島唄の経験
- 9月5日 沖縄県観光振興課にて観光政策と現状・課題について解説、南城市商工観光課にて市の観光の取り組みと課題について解説
- 9月6日 北谷町商工観光課にて町の観光の取り組みと課題について解説を受ける、北谷町の各種観光スポットの訪問
- 9月7日 自由行動、移動

写真①沖縄メインの観光スポット国際通り。②米台風の中の沖縄県庁訪問。③県庁で観光政策について学習。④南城市の「おでかけなんじい」。⑤北谷町役場での解説。⑥アメリカンビレッジ。⑦台風の中アメリカンビレッジ施設見学。⑧すぐ隣は米軍基地の鉄鎖が



●総括

沖縄の観光とその課題について調査するにあたり、北海道でも同様の課題となっている季節・体験・交通という3つのテーマを設定した。

季節性への対策としては、北海道の冬の落ち込み対策までではなくとも、沖縄も同様の閑散期対策を課題とし、例として、リゾートウェディングなどで観光動員の季節変動を平準化し、実際、北谷町ではそのスポットが活況を呈していた。

体験観光では、北谷町のアメリカンビレッジを拡充させ、米軍基地問題がありながら、歴史的にアメリカ的な生活文化のスタイルを観光資源として生かしていた。南城市では、地元の自然資源を生かしたサイクリングなどの参加型の観光を追求し、北谷町とは対照的な地域でもあった。

最後に、交通問題対策については、県の交通機関別分担率が9割という車依存の社会の中、観光客もレンタカー派が多数であり、基地問題も絡んで公共交通が充実していない事情が視られ、北谷町では、大規模の無料駐車場を工夫して作り、南城市は「おでかけなんじい」というバスと公共交通としてのバス再編を追求しようとしていた。地域性は異なるが、実態に合わせた対策をそれぞれきめ細かく取り組んでいることが理解できたのではないかな。

学生研修記

外川 理華子
地域経済学科3年
札幌清田高校出身



全県的に観光に取り組む沖縄から学ぶ

私たちは、まず沖縄県庁で観光政策全体についての話を聞き、その後、南城市、北谷町の観光の取組について役場の話を聞きに行ったが、台風の中、現地の観光スポットを体験、調査することはできなかった。

私は、特に南城市の観光の取組が印象に残った。南城市の政策やその一つ一つの取組について話を聞き、沖縄で一番小さい市であるにもかかわらず、非常にきめ細かい施策をとっているという説明を聞き、どうにかして発展してやろう、という感じを強く受けました。道内の観光地についてはいろいろ聞いたが、経験もしてきたが、北海道と比較すると、沖縄は、いずれも全県的に観光に注力しているように見え、オール沖縄で頑張っていることに強い印象をもった。日本が「観光」に対して覚悟をきめる時、沖縄の三か所の研修で、その在り方について深く学ぶことができた。

室井 斗哉
地域経済学科3年
佐呂間高校出身



アイデア力で勝る沖縄観光

南城市と北谷町を訪問して考えたことは、この二つの地域が観光のあり方として対照的であったことである。

南城市は、世界遺産の斎場御嶽（せーふあうたき）を擁し、海岸やキャンプ場、そしてサイクリングコースの設定など、それぞれきめ細かく地元の観光資源を生かそうとしていると言えます。一方の北谷町は、米軍基地の返還地を生かし、基地問題とかで十分でない公共交通にもかかわらず、大規模な施設の「アメリカンビレッジ」を拡大させていた。

対照的な二か所とはいえ、いずれも与えられたもので観光をつくる、という実態に、よく、「北海道は広くてなんもない」を言い訳にしているようにも見え、また観光施策という面でも沖縄はアイデア力で勝っているように思いました。北海道は素材が良すぎて、それに甘んじているとも見え、負けてられない、ということがこの研修で学んだことでした。



2部 山田誠治ゼミⅠ

参加学生数4名



山田 誠治

地域経済学科
教授



国稀酒造前にて

酒蔵とその観光による地域活性化

研修地：増毛町・旭川市・上川町

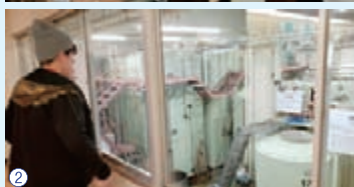
●研修目的

2部山田ゼミⅠでは、北海道の地域の活性化を学修の課題としており、地域研修として、近年、輸出や観光で注目されている酒蔵とそれを活用したまちづくりをしている増毛町を訪問し、それぞれの日本酒製造の現状と、観光の現状について、訪問して調査した。

研修先・日程

- 10月25日 増毛町国稀酒造を訪問
増毛町商工観光課で解説
10月26日 旭川市男山酒造を訪問
上川町上川大雪酒造を訪問

写真①国稀酒造で日本酒造りの解説を受ける。②このタンクの中で酒づくり。③酒造は一つの文化。④増毛は古い町並が観光資源に。⑤増毛町で解説を受ける。⑥観光施設としても充実している男山酒造。⑦男山酒造り資料館で学習中。⑧新しい上川大雪酒造



●総括

三か所の日本酒醸造所を訪問したが、それぞれ特徴的な酒造りを展開していた。男山は、歴史的に本州の老舗の銘柄を旭川で展開し、海外進出も積極的に展開していることが解った。上川大雪酒造は、2017年に戦後初めて誕生した酒蔵で、米と水の良さから上川が選ばれ、その製品も賞をとるなど、その活躍ぶりと経営者の熱意や活躍が伝わってきた。国稀は、日本最北端の酒蔵で、かつての歴史を彷彿させる建物を丁寧に継承しながら、周りの歴史的建造物とともに増毛町の観光名所として重要な役割を果たし、町役場の説明では、この歴史的建造物は、まち歩き観光にとっても重要で、保存以外に特別なことをしない中でその価値が評価されてきたそうだ。日本酒は、現在海外でも注目され、輸出の拡大が期待されており、地域の一産業としての発展も期待されている。また、酒蔵は地域の観光資源として生かすことが全国で展開されている。

増毛町の観光の課題は、まず交通の問題が大きく、お酒を生かすという点からも工夫が必要だと考えられ、しかし、自然体のマイペース型の観光の良さも感じられ、それを残しながら当地の多彩で豊かな果物や海産物を生かすとさらなる可能性が考えられる地域であった。

学生研修記

五十嵐 結唯

地域経済学科2年
札幌白石高校出身



河島 拓馬

地域経済学科2年
伊達緑丘高校出身



酒蔵と日本酒のいろいろを実感

私は、増毛町・旭川市・上川町の酒蔵のそれぞれ特徴が一番印象に残ってます。

増毛の国稀は、歴史を感じさせる古い街並みの中の建物で、日本酒に関心のない人でも魅力ある施設でした。私は二十歳になったばかりで日本酒も初めての体験でしたが、いろいろな日本酒を味わうことで、その深みを実感しました。

旭川の男山は、この三つの中では最も規模が大きく、施設は三階建てで、一階でいろいろ試飲ができ、二・三階の資料館では、実際の酒造りの道具や工場の工程も見学でき、実際に外国人観光客も来訪しており、いろいろな学びになりました。

上川町の上川大雪は、できたての酒蔵として、他の二つとは違って、若者に親しみをもてるように、建物から店舗の中も含め、デザインが工夫されていることを実感しました。

いずれも、日本酒を軸に観光と結びついて発展する可能性を実感しました。

マイペースだからの観光のまちづくり

増毛町のまちづくり観光については、実際に施設を回り、町役場で観光のまちづくりの話を聞いて、思った以上に多くの観光資源を持ったまちだと思いました。

増毛町は、古くからの漁港で、映画『駅』の舞台だったことを生かしてこじんまりとしながら、当時の栄えた時代の雰囲気が残っている施設を生かし、小粒なようで魅力ある観光地となっています。役場の方の説明にあったマイペースでまち歩き観光地として徐々に注目を浴びようになり、地元もその点を意識しながらまちづくりをしている、ことに得心しました。食べものでも、米、果物、魚といろいろなものがあり、増毛町が発祥と言われるタコザンギは、とてもよかったです。

これから日本酒が世界で注目され、観光の面でも酒蔵を軸にした地域の観光が期待されると思うので、それに対応する施策ももっと必要になると思います。



現地研修フォトギャラリー



地域研修報告会 | 2019年11月30日・12月7日 40番教室、50番教室、16番教室

総勢で25ゼミが2日間に分かれ、3つの教室で発表しました。報告会では、それぞれのゼミが事前学習と現地調査の結果をまとめ、そこから得た成果と課題について発表しました。各ゼミの発表に対して、出席した教員や学生から質問や講評が出され、意見交換を行いました。

◎11月30日 報告ゼミ順序と研修地

●40番教室 コメンテーター：佐藤先生(司会)・内田先生

①内田1部I・II(平取) ②佐藤1部I・II(美唄・三笠) ③宮入1部I・II(富良野) ④濱田1部II(東川) ⑤古林1部II(鯖江)

●50番教室 コメンテーター：濱田先生(司会)・西村先生

①濱田1部I(東川) ②古林1部I(釧路) ③濱田2部I・II(歌志内) ④西村1部I・II(豊頃) ⑤西村2部I・II(厚真)

●16番教室 コメンテーター：早尻先生(司会)・宮入先生

①佐藤2部I・II(北広島) ②内田2部I・II(京都) ③水野1部I・II(幌加内) ④中園1部I(札幌) ⑤宮入2部I・II(豊頃)

◎12月7日 報告ゼミ順序と研修地

●40番教室 コメンテーター：浅妻先生(司会)・徐先生

①川村1部I・II(札幌) ②徐1部I・II(千歳) ③浅妻2部I・II(安平・登別) ④山田1部I(札幌) ⑤早尻1部I・II(寿都)

●50番教室 コメンテーター：平野先生(司会)・山田先生

①山田1部II(沖縄) ②山田2部I(旭川) ③水野谷1部I・II(奥尻) ④平野1部I・II(札幌) ⑤浅妻1部I・II(芦別)

◎報告会の準備

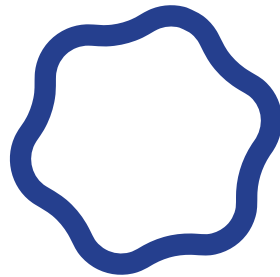






北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2019



北海学園大学 経済学部

〔経済学科・地域経済学科〕

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<https://www.hgu.jp/>

<https://econ.hgu.jp/>

2020年3月発行

制作(株)ラボット